

# 「若年層の観光活動の減少要因に関する研究」 に対するコメント および 「国内宿泊観光の宿泊数に関する実態把握と 施策ターゲットの抽出」

2010 年 7 月 28 日 (水) 18:00 ~  
第101回 運輸政策コロキウム  
於: (財)運輸政策研究機構 会議室

**日比野 直彦**

政策研究大学院大学  
大学院 政策研究科 准教授



# 奥山研究員の発表への総括

- 「**若年層の観光離れ**」に焦点をあて、**観光統計データ**等を基に、定量的に考察している点は、たいへん興味深い！
- 時系列分析により、いくつかの要因が抽出されたことは大きな前進であり、**政策提言に向けた今後のさらなる研究に繋がる基礎的な分析**としては評価できる！

## 奥山研究員の発表へのコメント

- 過去1年間に於いて「観光」を行わなかった理由の「**経済的**」「**時間的**」に着目しているが...
- この回答をどのように捉えるべきか？



- お金が多分にあって、時間が余っていたら、今の「**20歳代**」は、本当に「**観光旅行**」を行うのか？

- 若年層の嗜好、活動の変化と観光行動の関係を理解することが重要！

昔

アルバイト

自動車の購入

友人との行動

観光旅行

特に、「旅行」をしたくない人でも  
「友人との遊び」との一部として  
「観光旅行」を実施

今

家計簿男子

お弁当男子

草食系男子

個人行動の増加

自分の好きなことになら、お金  
も時間も使うが、他人とともに  
行動することに価値を感じない

- 単に、旅行費用、休暇の問題ではなく、  
**根本的な価値観を見直す**必要があるのでは  
ないか？

第101回 運輸政策コロキウム

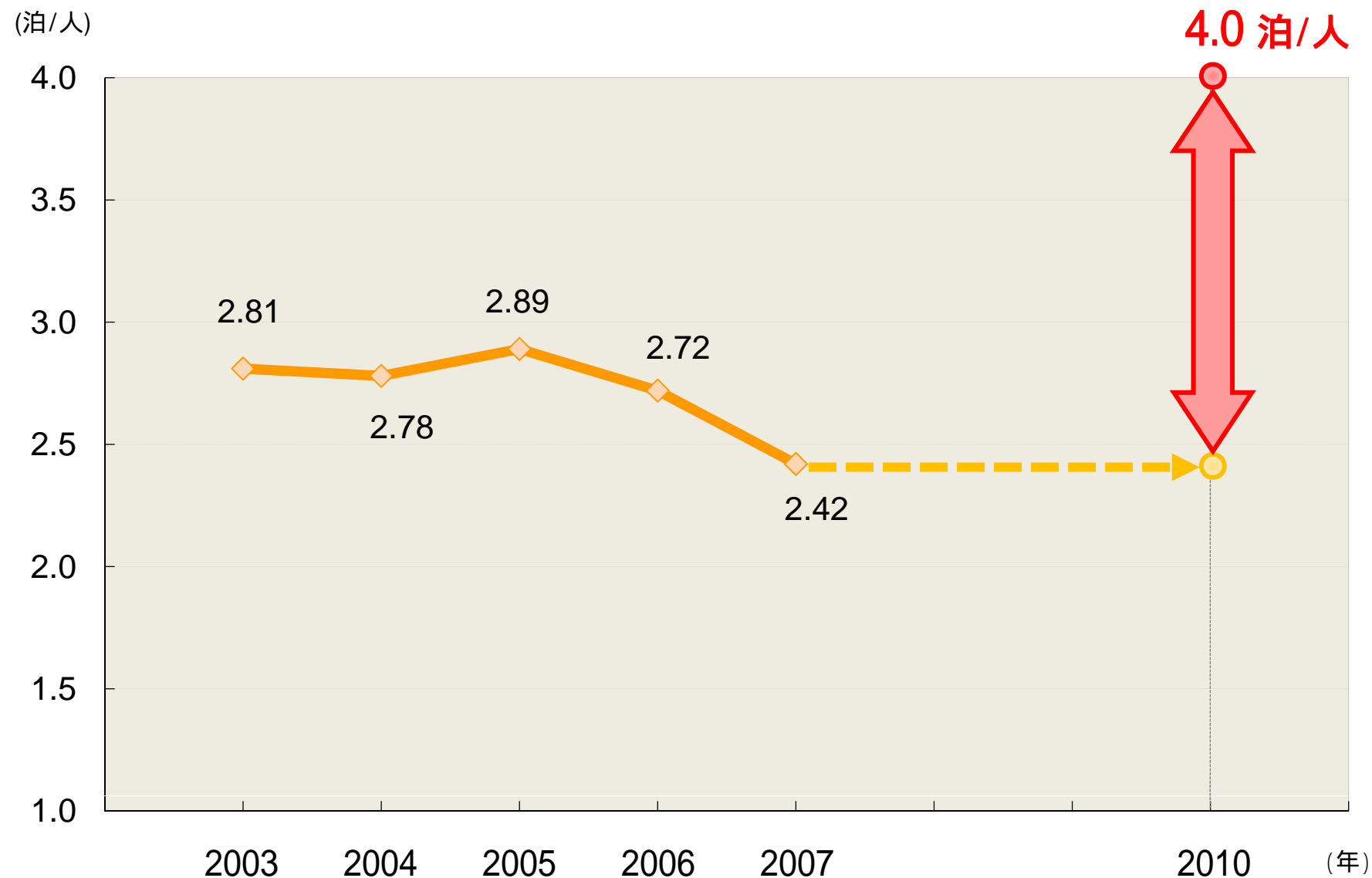
# 国内宿泊観光の宿泊数に関する 実態把握と施策ターゲットの抽出

# なぜ「宿泊数」に着目する必要があるのか？

|   | 観光立国推進基本計画における5つの目標                                                                                              | 目標値                              |
|---|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------|
| 1 | 訪日外国人旅行者数を2010年までに <b>1,000万人</b> にすることを目標とし、将来的には、3,000万人を目指す。<br>( 1,500万人(2013) 2,000万人(2016) 2,500万人(2019) ) | 733 万人(2006)<br>1,000 万人(2010)   |
| 2 | 日本人の海外旅行者数を2010年までに <b>2,000万人</b> にすることを目標とし、国際相互交流を拡大させる。                                                      | 1,735 万人(2006)<br>2,000 万人(2010) |
| 3 | 旅行を促す環境整備や観光産業の生産性向上による多様なサービスの提供を通じた新たな需要の創出等を通じ、国内における観光旅行消費額を2010年度までに <b>30兆円</b> にすることを目標とする。               | 24.4 兆円(2005)<br>30 兆円(2010)     |
| 4 | 日本人の国内観光旅行による1人当たりの宿泊数を2010年度までにもう1泊増やし、年間 <b>4泊</b> にすることを目標とする。                                                | 2.77 泊(2006)<br>4 泊(2010)        |
| 5 | 我が国における国際会議の開催件数を2011年までに <b>5割以上</b> 増やすことを目標とし、アジアにおける最大の開催国を目指す。                                              | 168 件(2006)<br>252 件(2010)       |

(出典) 観光庁資料より作成

## 国民1人あたり泊数の推移



(出典) 国土交通省「平成20年度版観光白書」より作成

# 問題意識 (1)

国内宿泊観光行動の  
実態把握が十分に行なわれずに  
宿泊数に関する目標値が  
設定されているのではないか？

## 問題意識 (2)

**観光統計データが活用されていない！**

**多くの情報を含んだ貴重なデータであるにも  
関わらず、分析・考察等が不十分なため、  
施策に活かしきれていない**

# 本研究の目的

既存の観光統計データを用いて時系列分析を行うことにより

国内宿泊観光行動の過去のトレンドを

旅行者属性 (年齢階層, 活動等) に着目して把握

宿泊数に影響を与えている要因を抽出

今後の観光施策のターゲットを示す

# 分析データ

## 「国民の観光に関する動向調査」

社団法人  
 **日本観光協会**が調査し  
「**観光の実態と志向**」として出版

1964年からほぼ共通の項目で調査

1985年以降の調査における  
個票データを使用

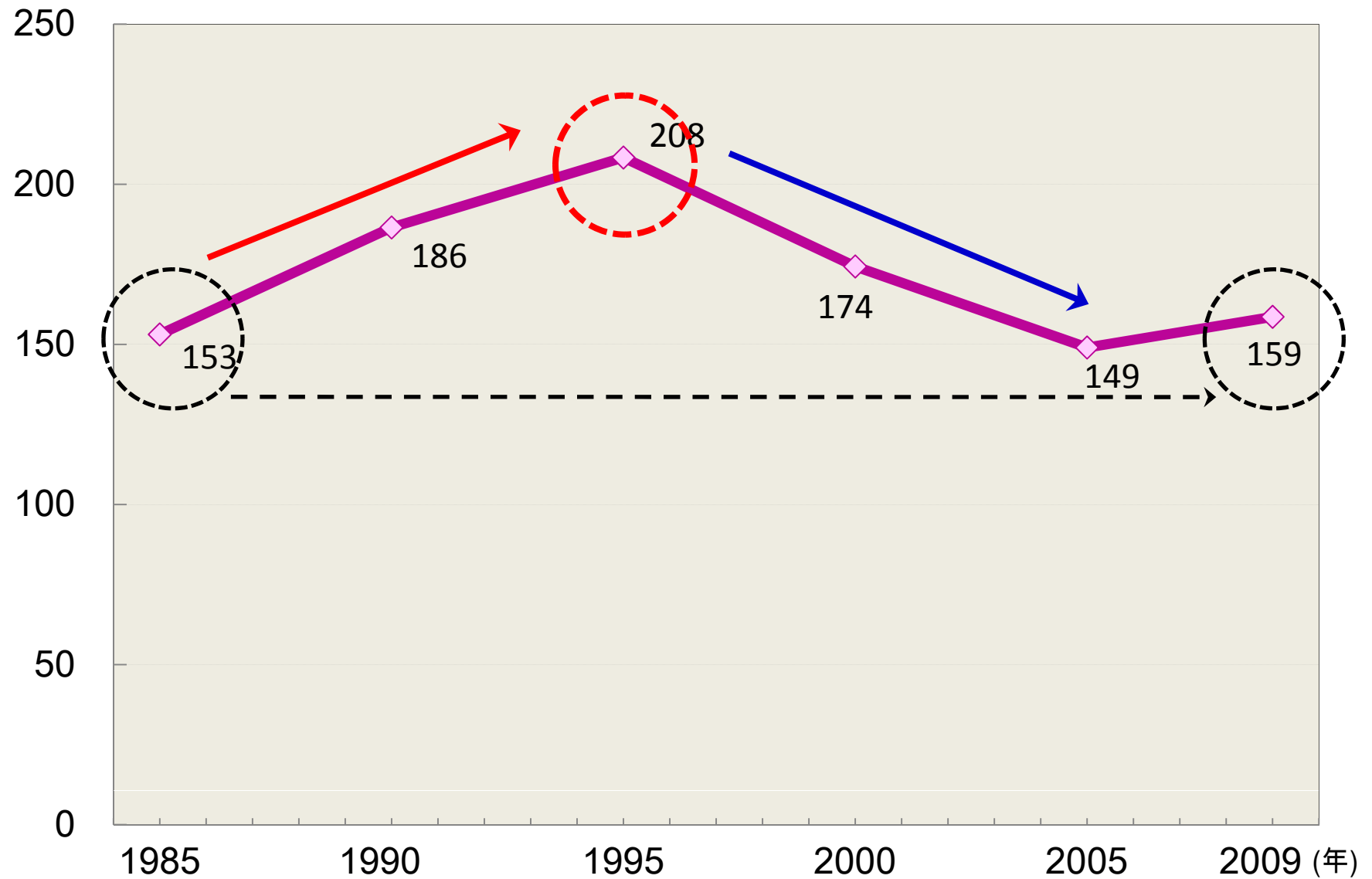
# 分析内容

1. 宿泊数に関する分析
2. 地域ブロック間の旅行者数の変動分析
3. 宿泊費に関する分析

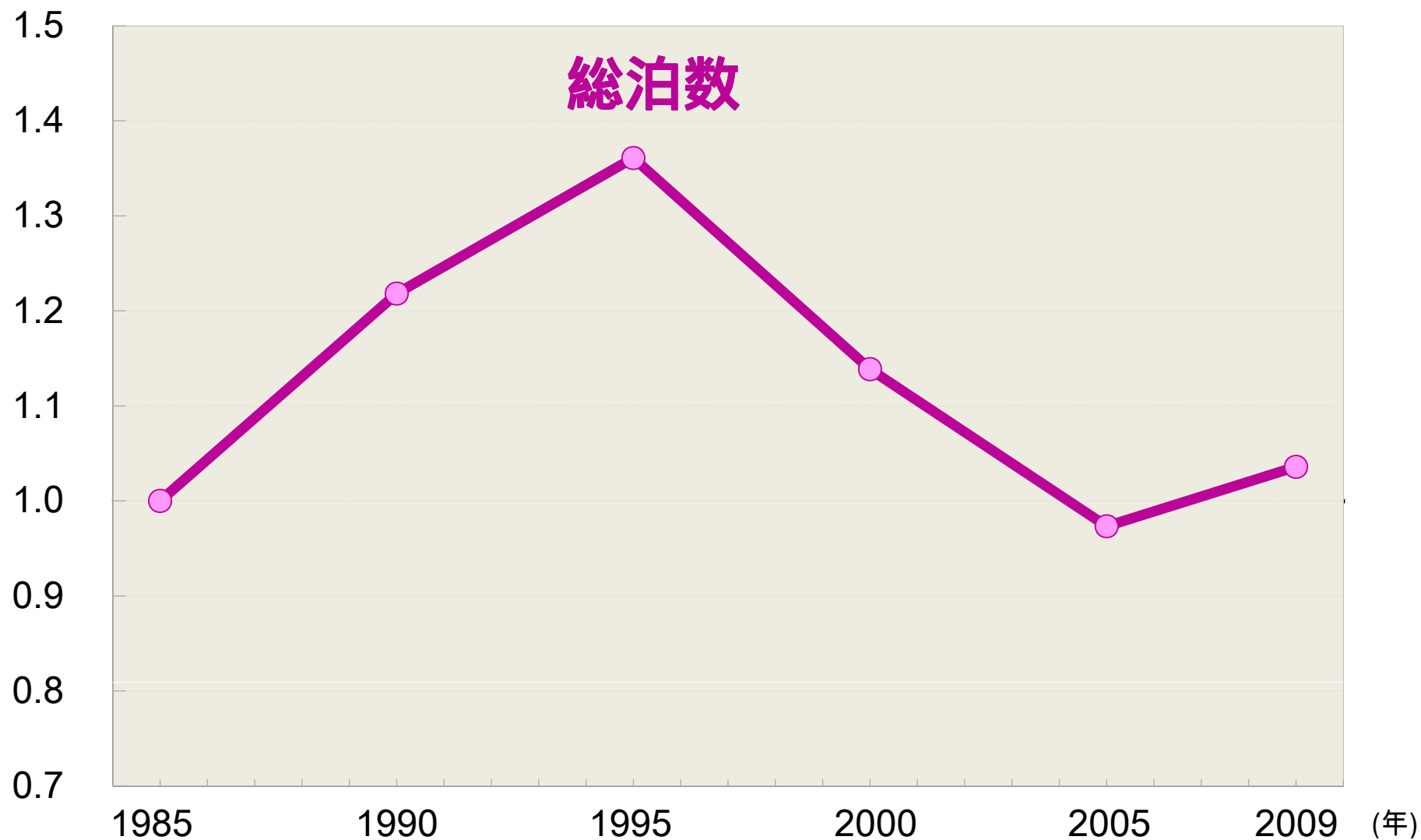
1. 宿泊数に関する分析
2. 地域ブロック間の旅行者数の変動分析
3. 宿泊費に関する分析

# 総泊数の推移

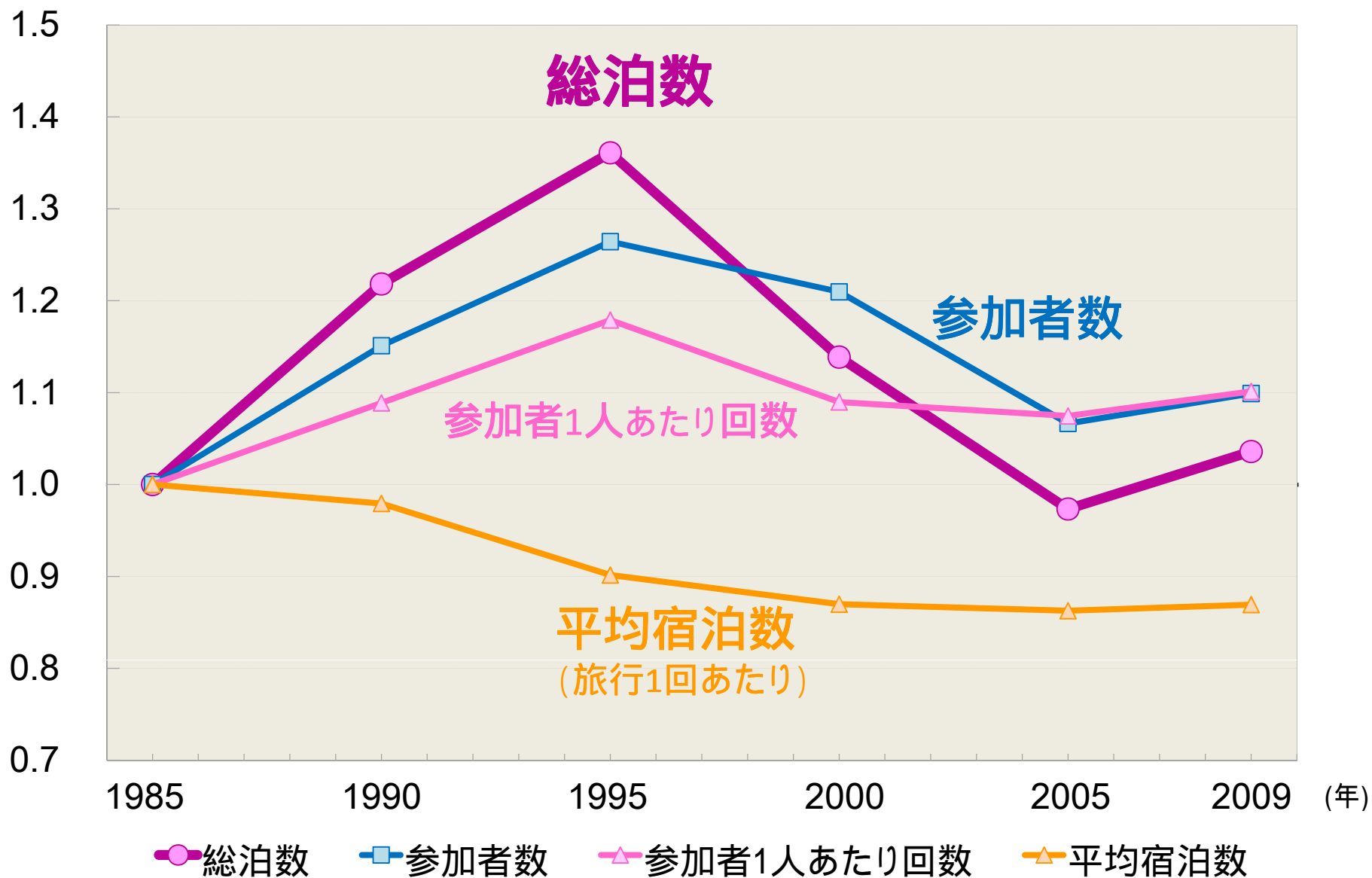
(百万人泊)



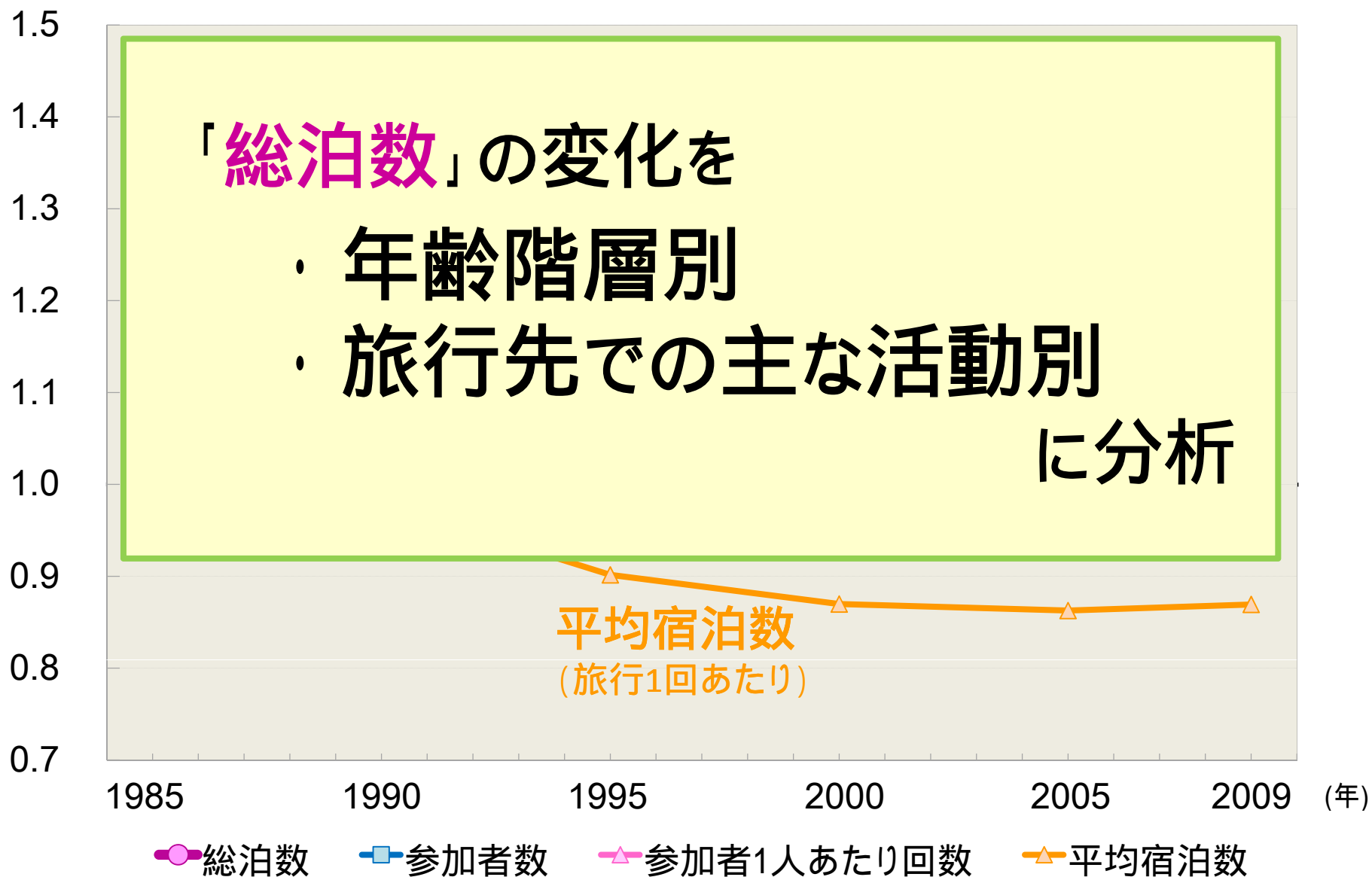
# 総泊数の推移 (1985年を1.0)



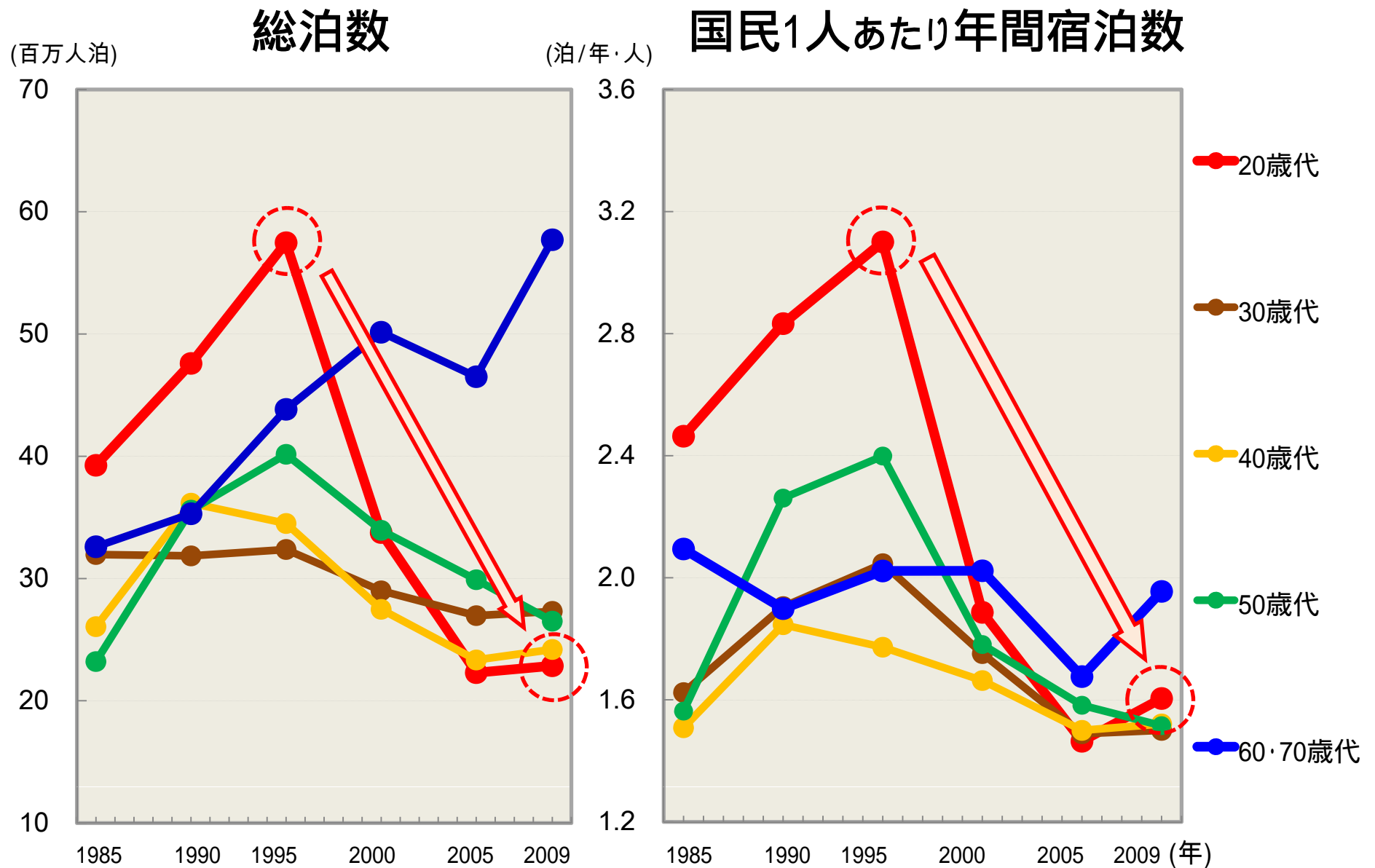
# 総泊数の推移 (1985年を1.0)



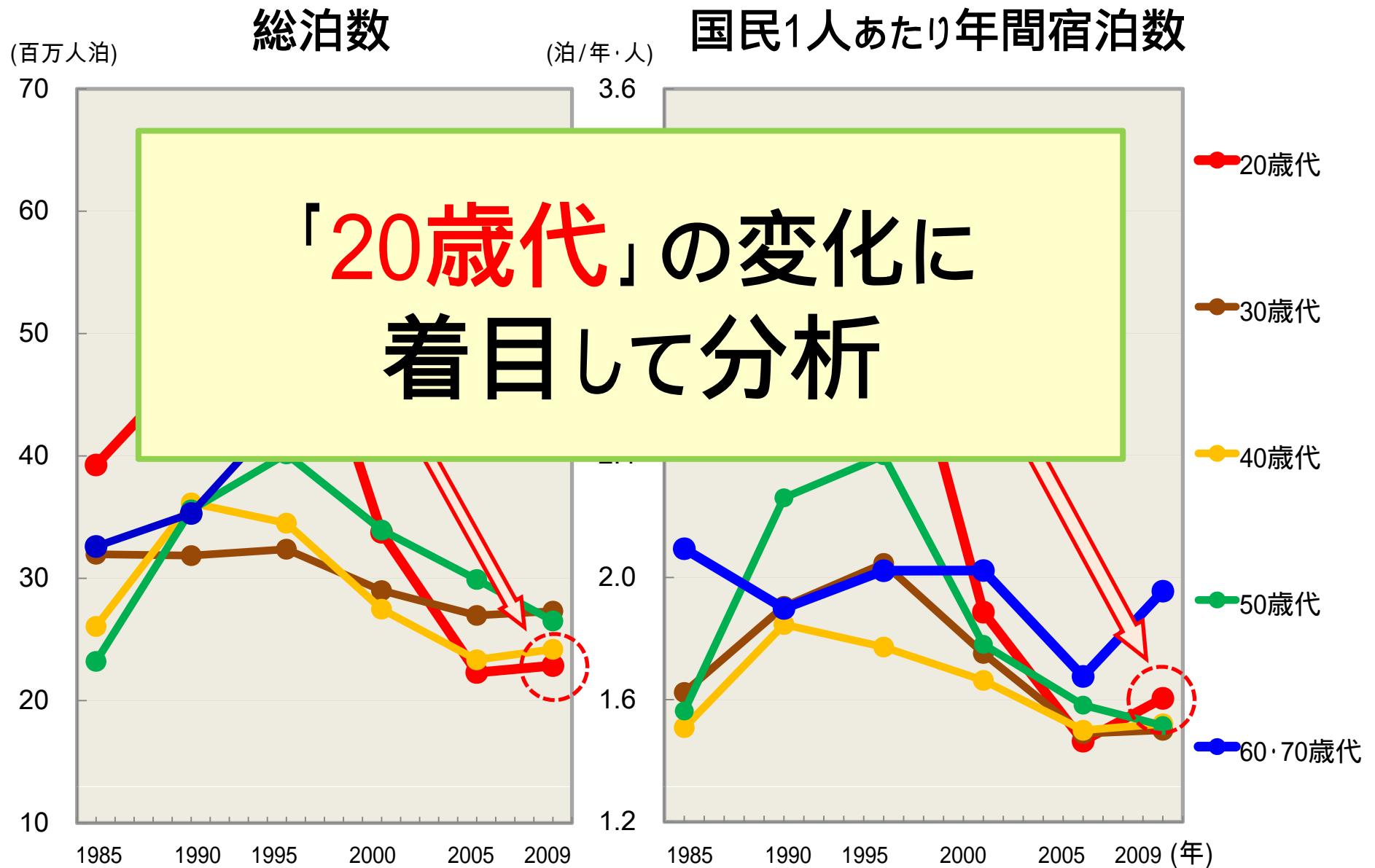
# 総泊数の推移 (1985年を1.0)



# 年齢階層別の宿泊数の推移

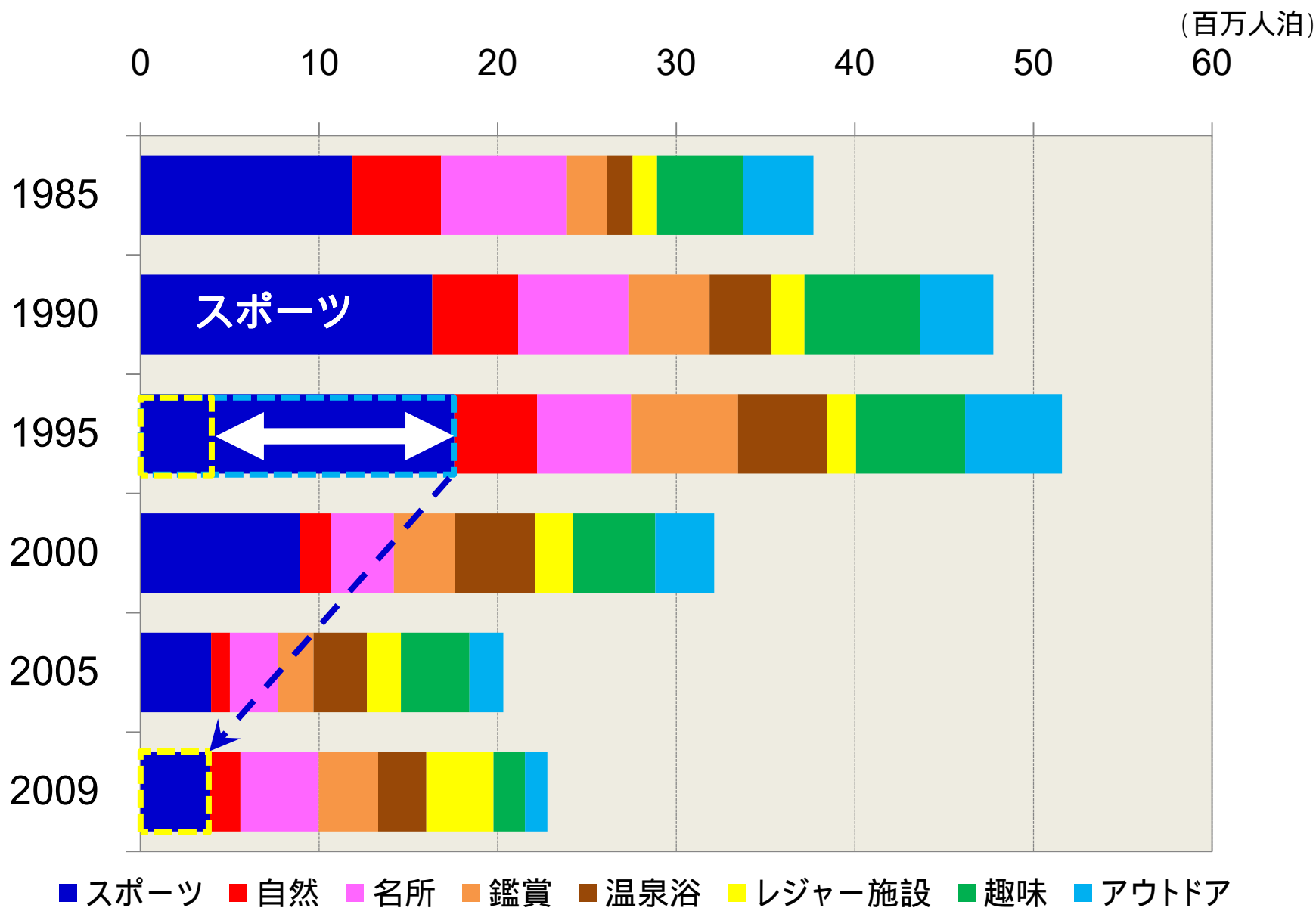


# 年齢階層別の宿泊数の推移



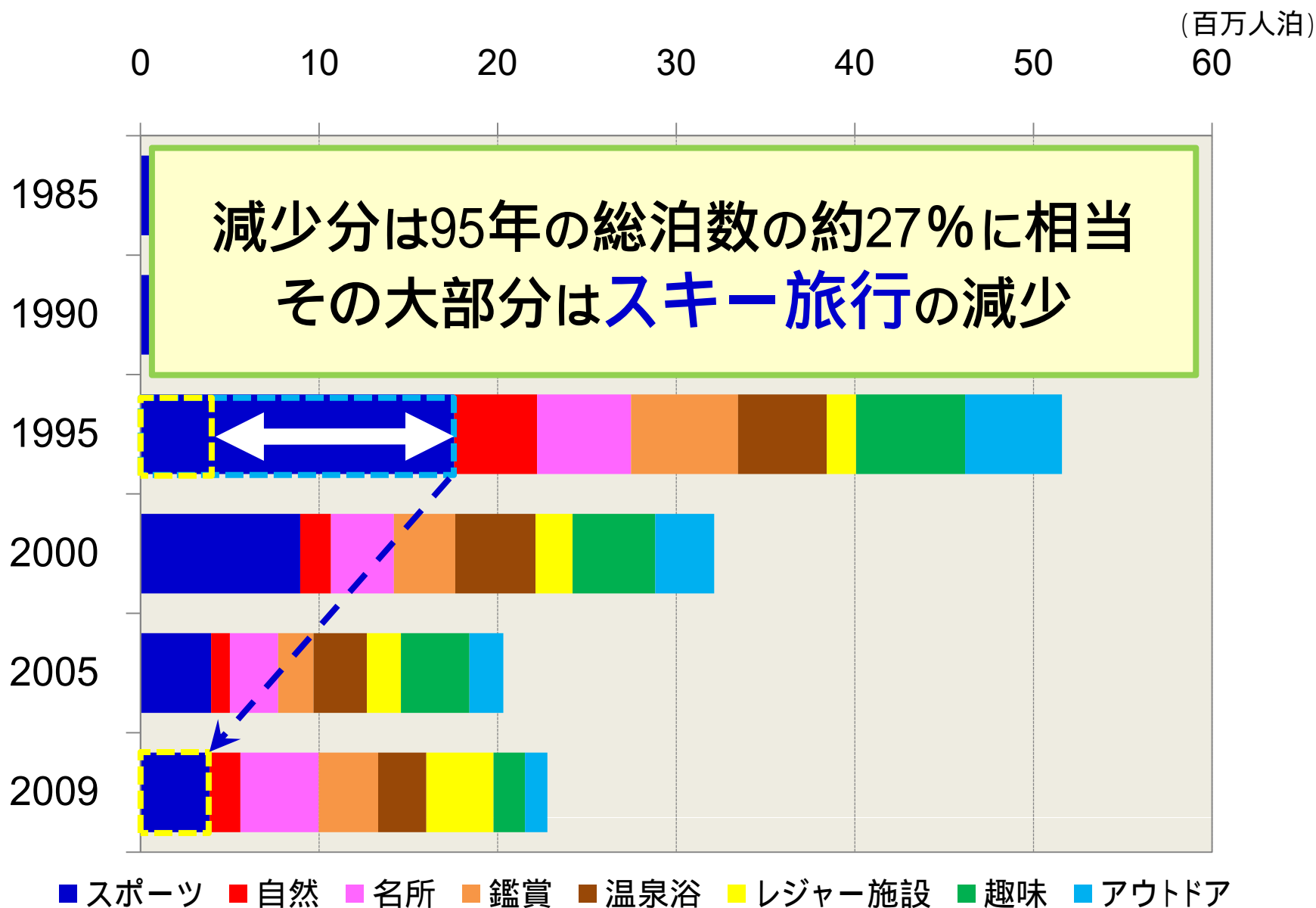
# 主活動別の総泊数の時系列変化

20歳代



# 主活動別の総泊数の時系列変化

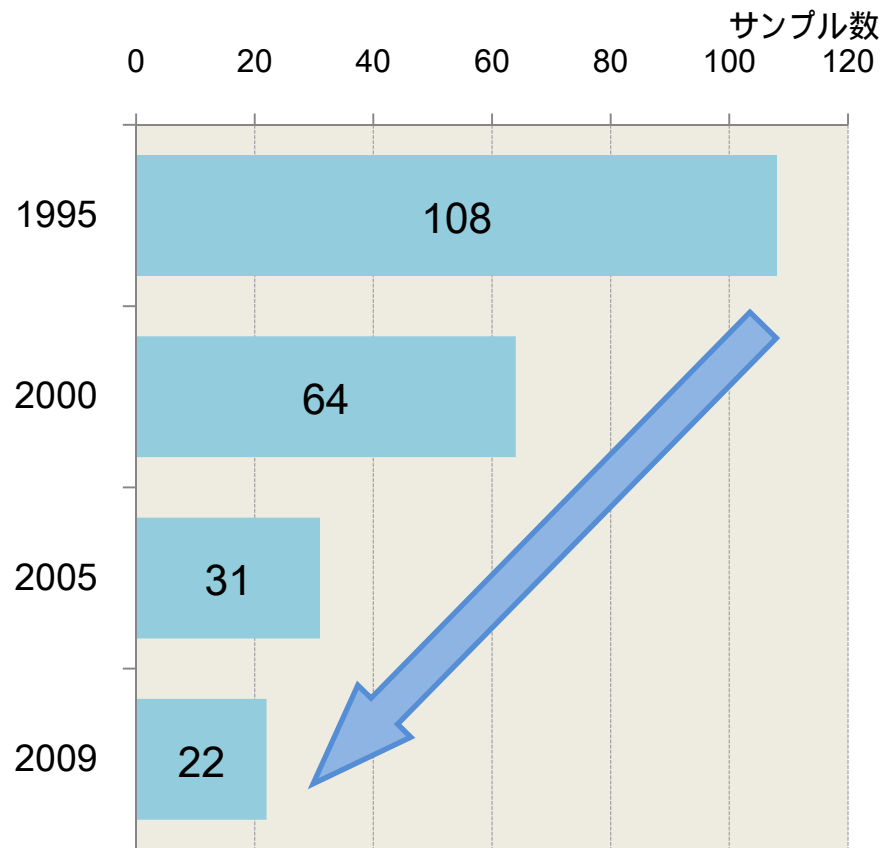
20歳代



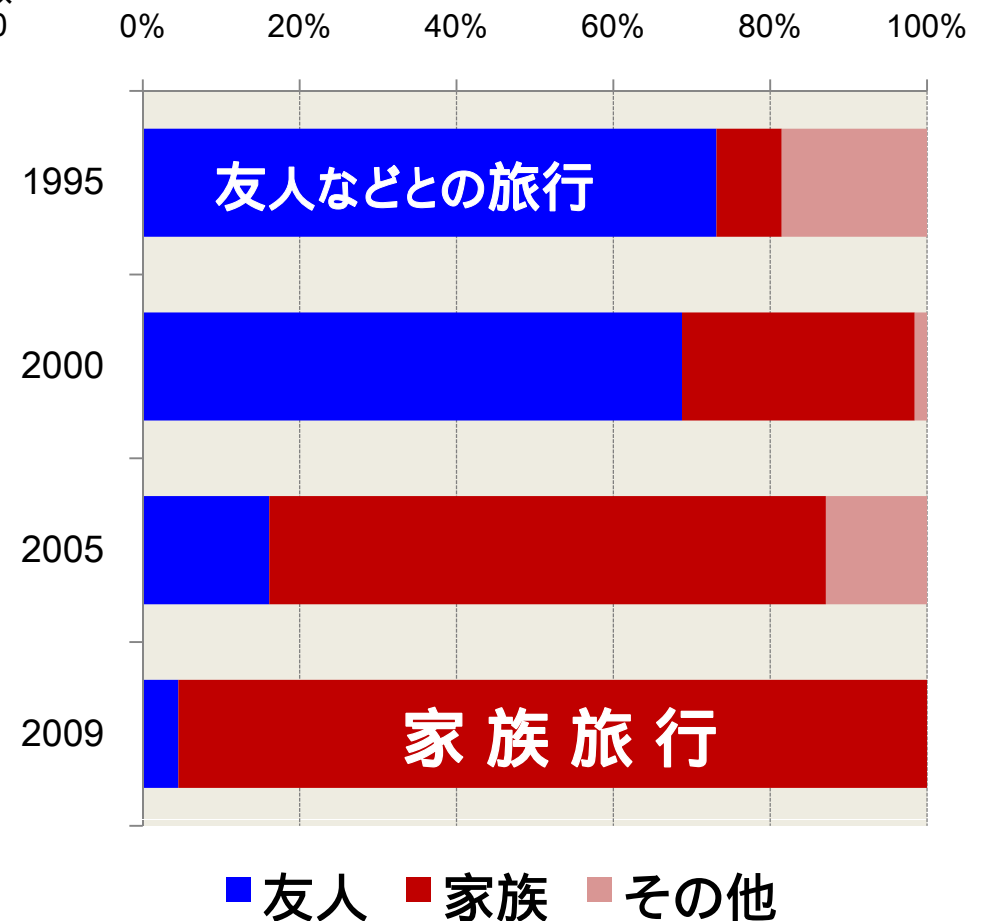
# 1966-1975年生のスキー旅行の変化

( 1995年・20-29歳      2009年・34-43歳 )

## スキー旅行参加者数

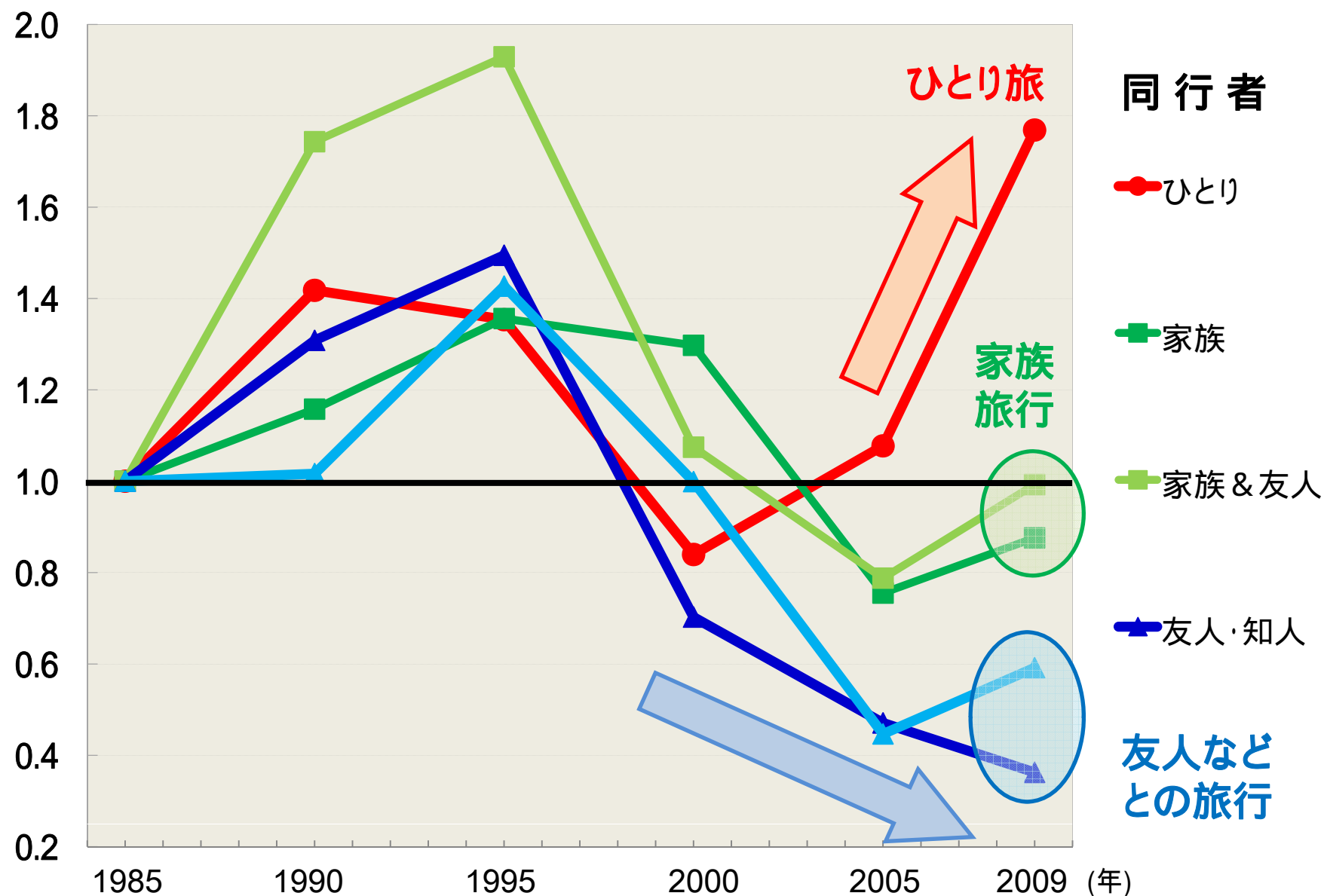


## 旅行形態の変化



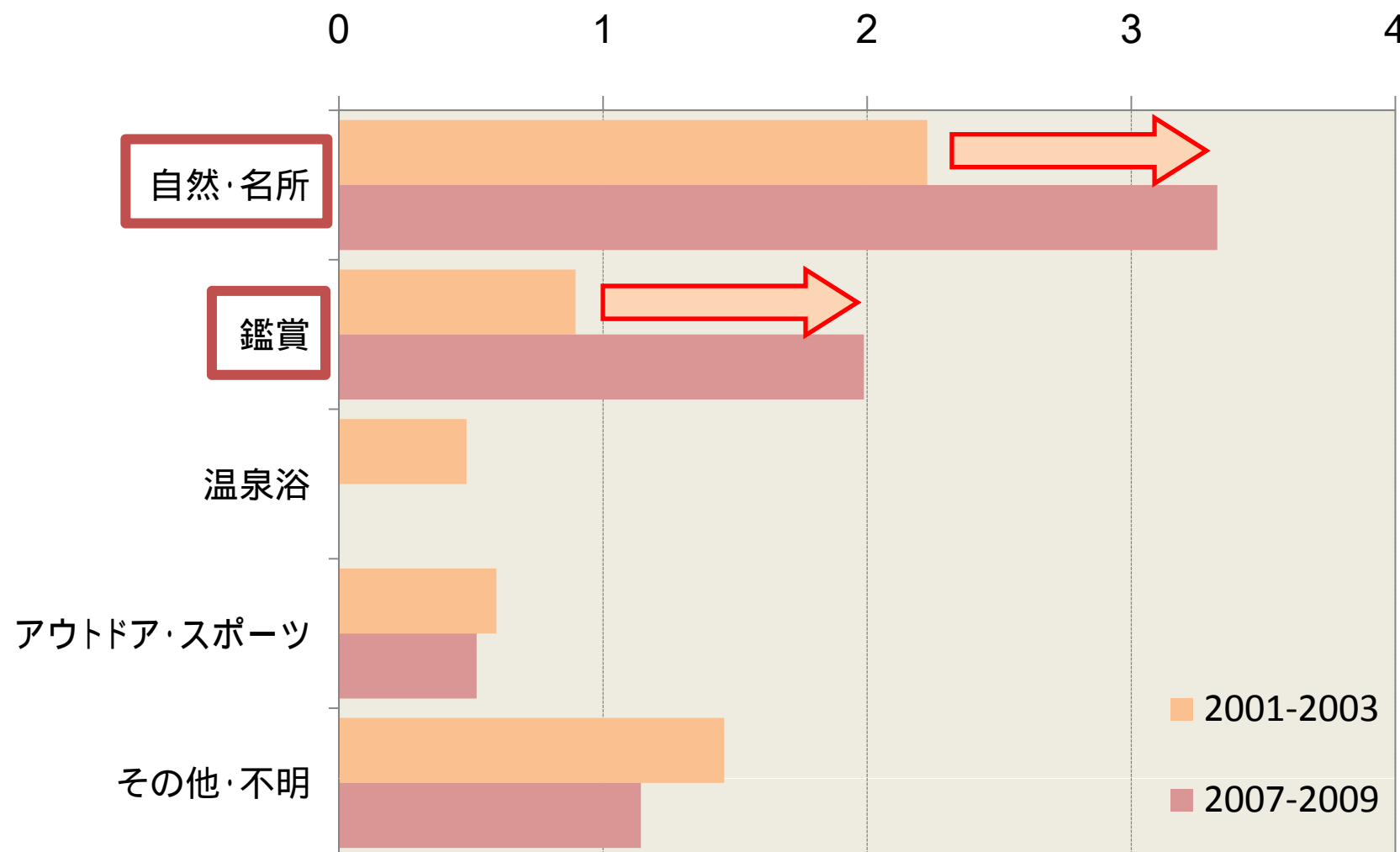
20歳代

# 旅行形態別の総泊数の推移 (1985年を1.0)



# ひとり旅の総泊数の変化 (旅行先での主な活動別)

(百万人泊)

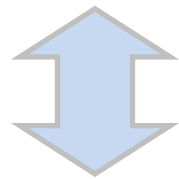


# 20歳代・宿泊数に関するまとめ

1995年以降 総泊数が激減

しかし、全ての面で一律に減少しているわけではなく

・友人との旅行(特にスポーツ旅行)が激減



・ひとり旅の増加

若者の個人行動化の進行の表れ

1. 宿泊数に関する分析
2. 地域ブロック間の旅行者数の変動分析
3. 宿泊費に関する分析

# 地域ブロックの区分

## 北海道

東北：青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島

北関東：茨城、栃木、群馬

首都圏：埼玉、千葉、東京、神奈川

甲信越：新潟、山梨、長野

中部：富山、石川、福井、岐阜、愛知、静岡

関西：三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山

中国：鳥取、島根、岡山、広島、山口

四国：徳島、香川、愛媛、高知

九州：福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄

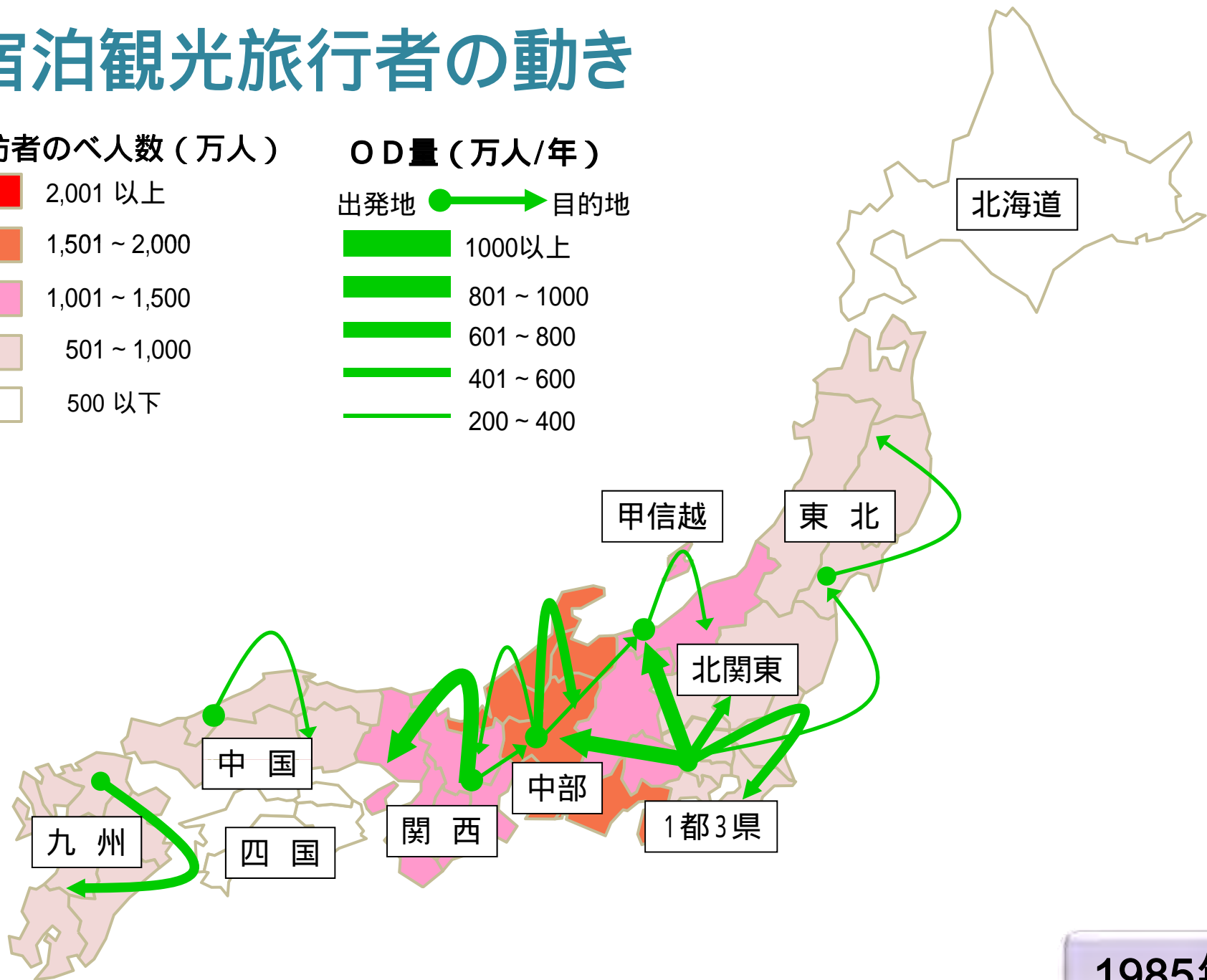
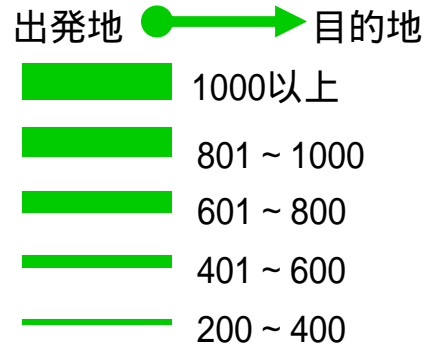


# 宿泊観光旅行者の動き

来訪者のべ人数（万人）



OD量（万人/年）



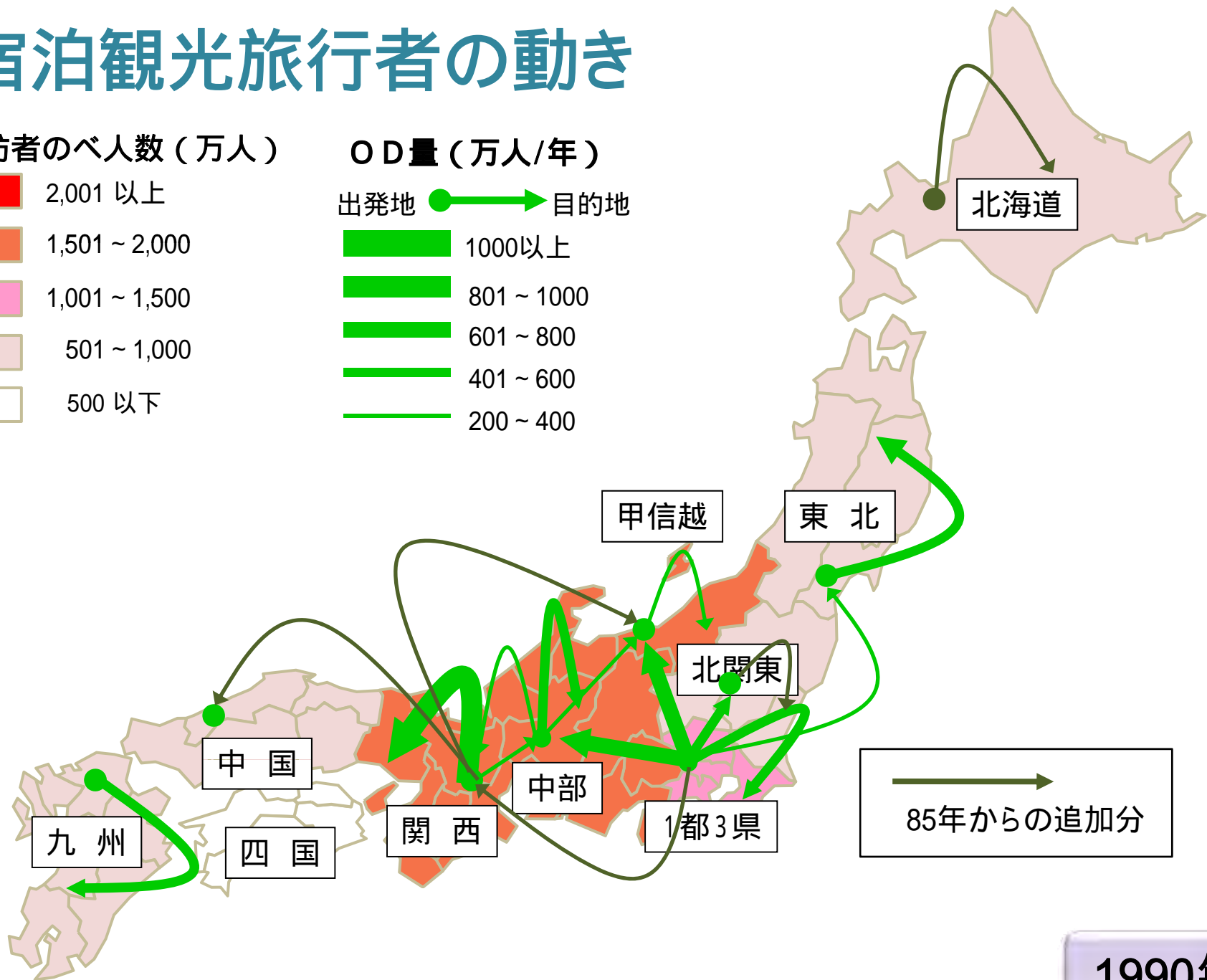
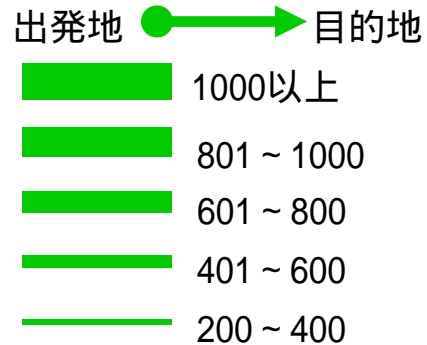
1985年

# 宿泊観光旅行者の動き

来訪者のべ人数（万人）



OD量（万人/年）

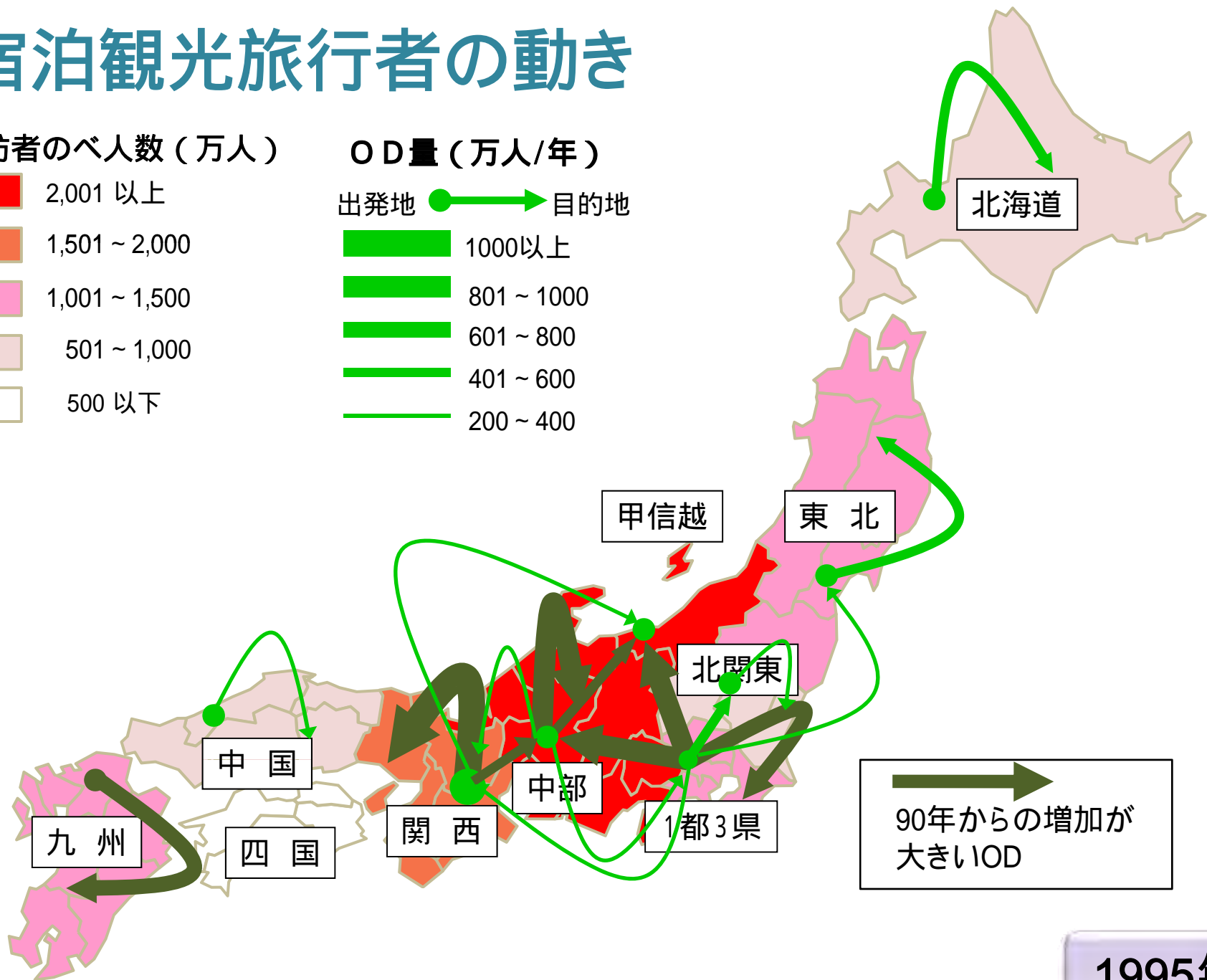
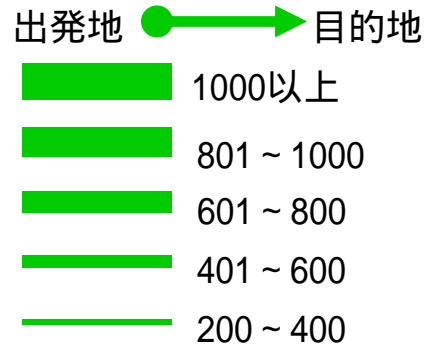


# 宿泊観光旅行者の動き

来訪者のべ人数（万人）



OD量（万人/年）



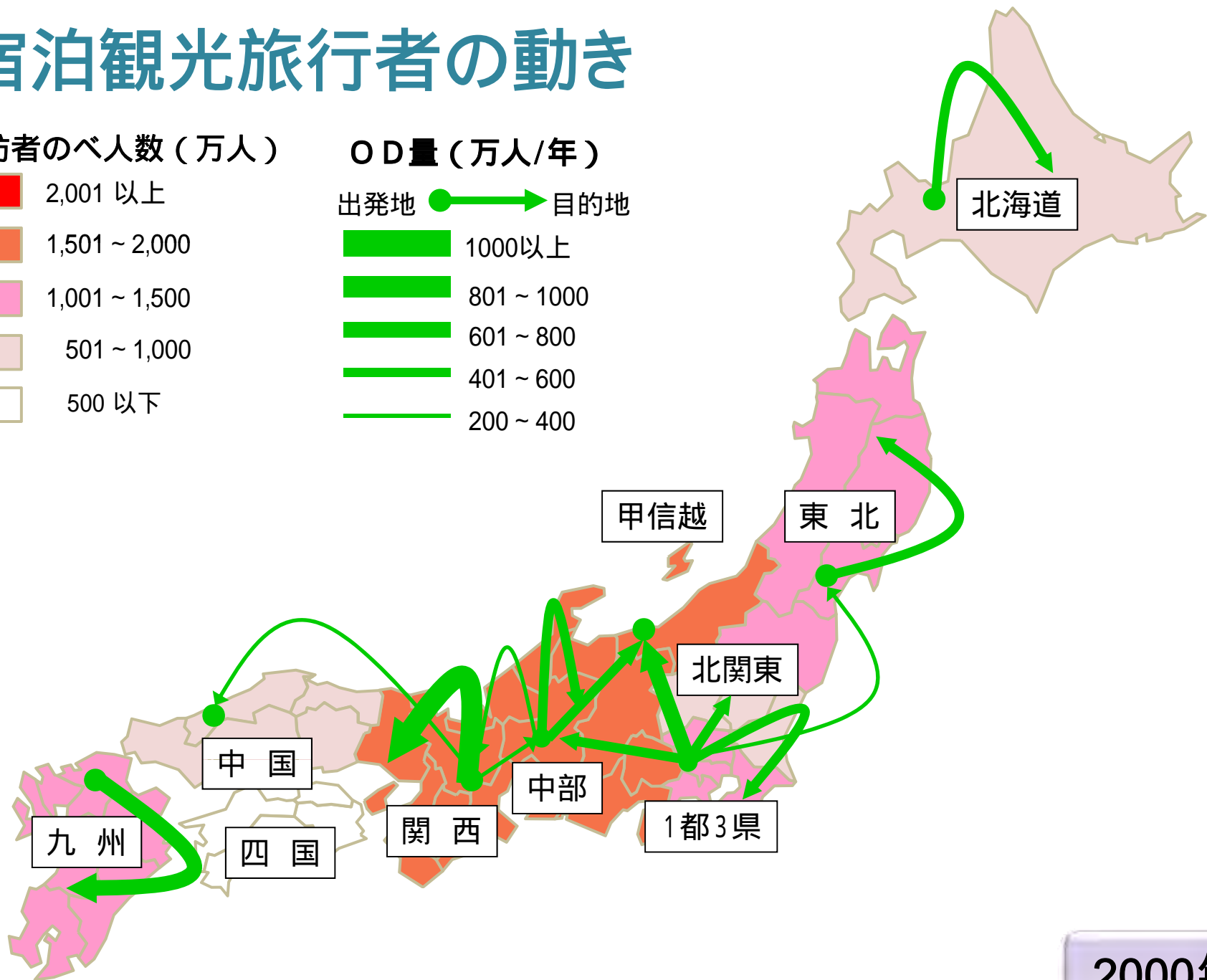
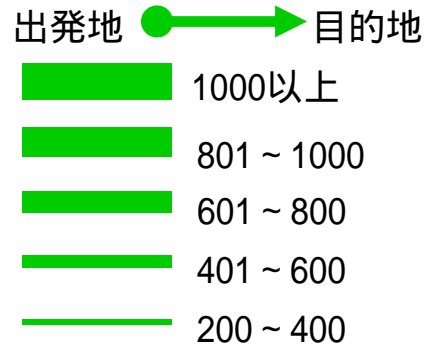
1995年

# 宿泊観光旅行者の動き

来訪者のべ人数（万人）



OD量（万人/年）



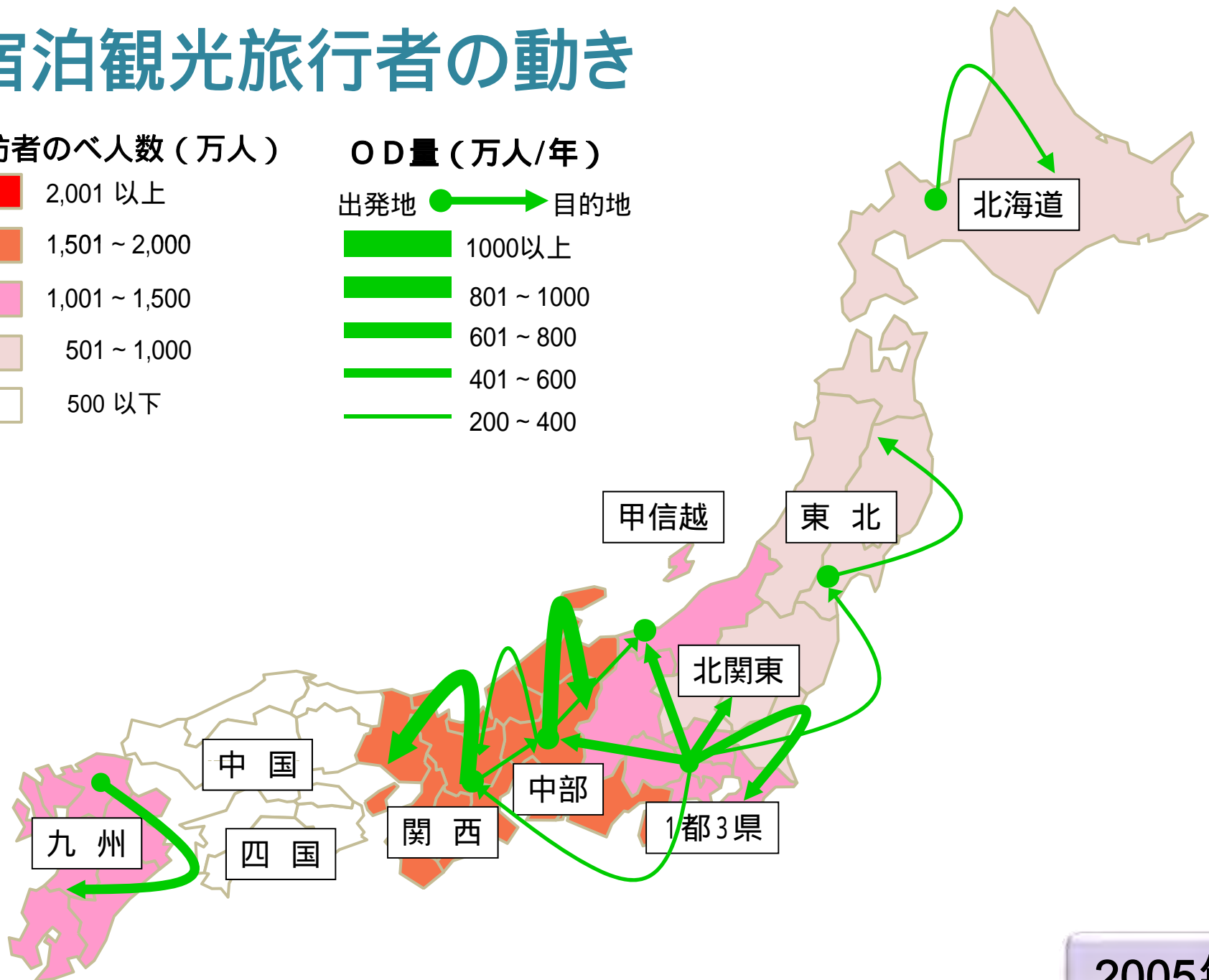
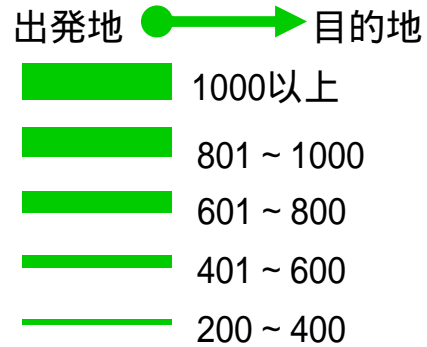
2000年

# 宿泊観光旅行者の動き

来訪者のべ人数（万人）



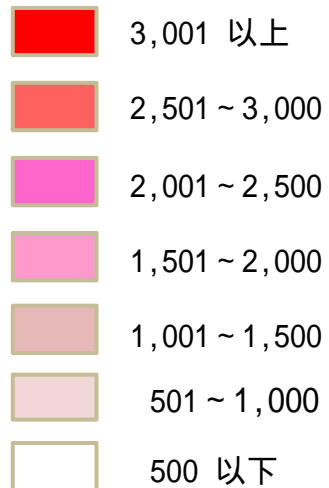
OD量（万人/年）



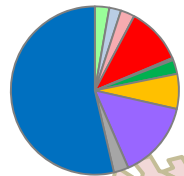
2005年

# 宿泊観光旅行者の動き

参加者のべ人数（万人）



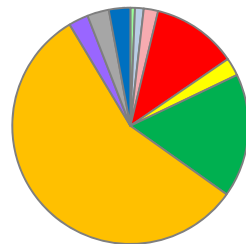
九州



中国



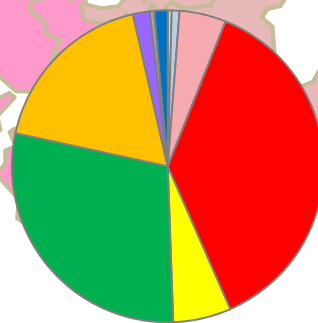
関西



四国



中部



九州発

北海道発

四国発

東北発

中国発

北関東発

関西発

首都圏発

中部発

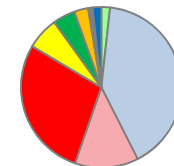
甲信越発

甲信越

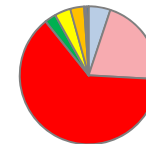
北海道



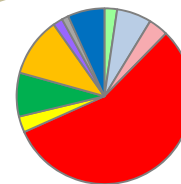
東北



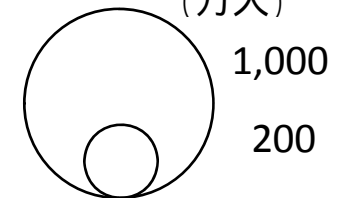
北関東



1都3県



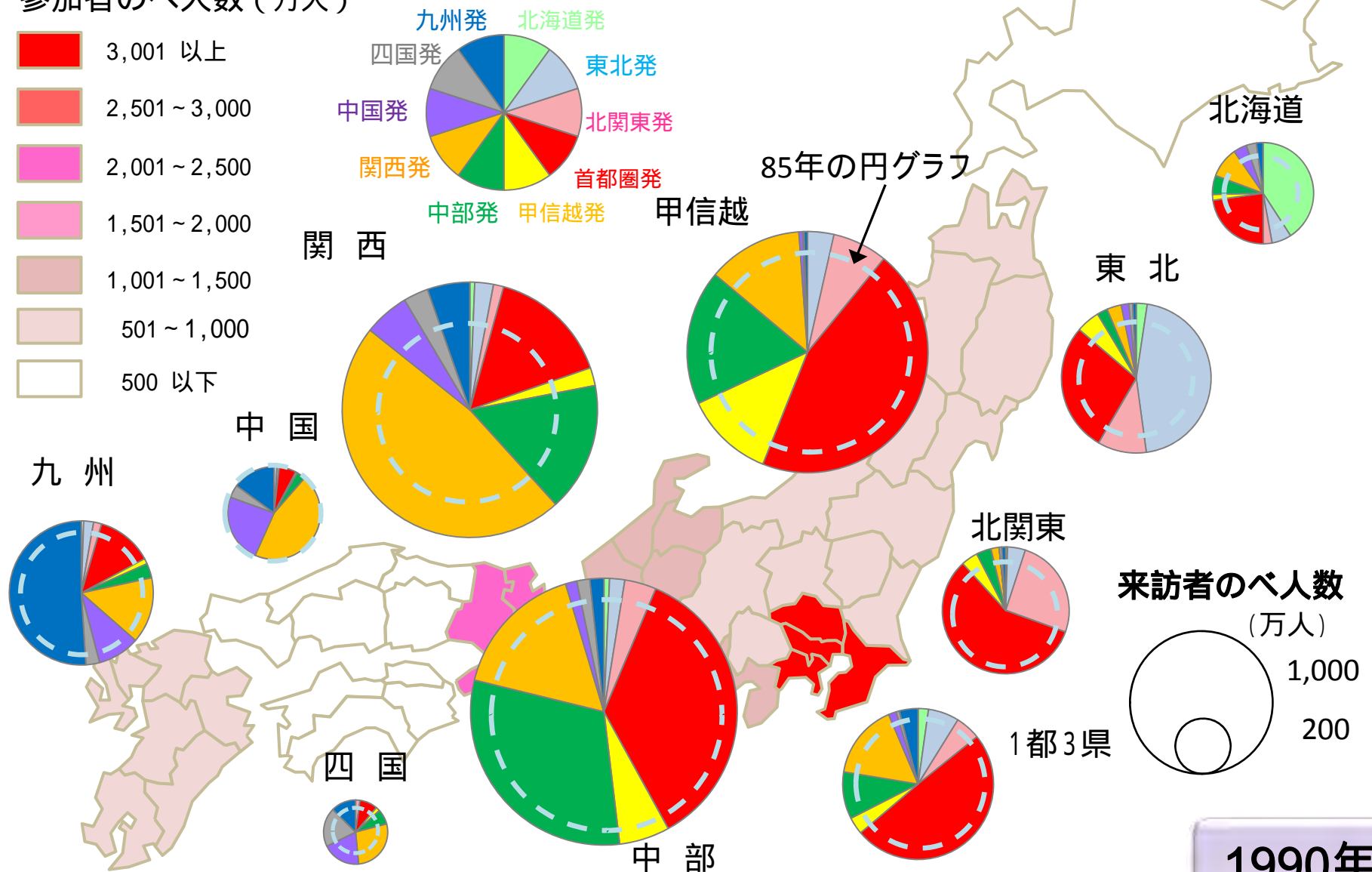
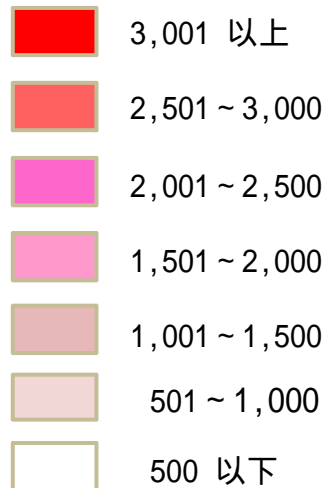
来訪者のべ人数  
（万人）



1985年

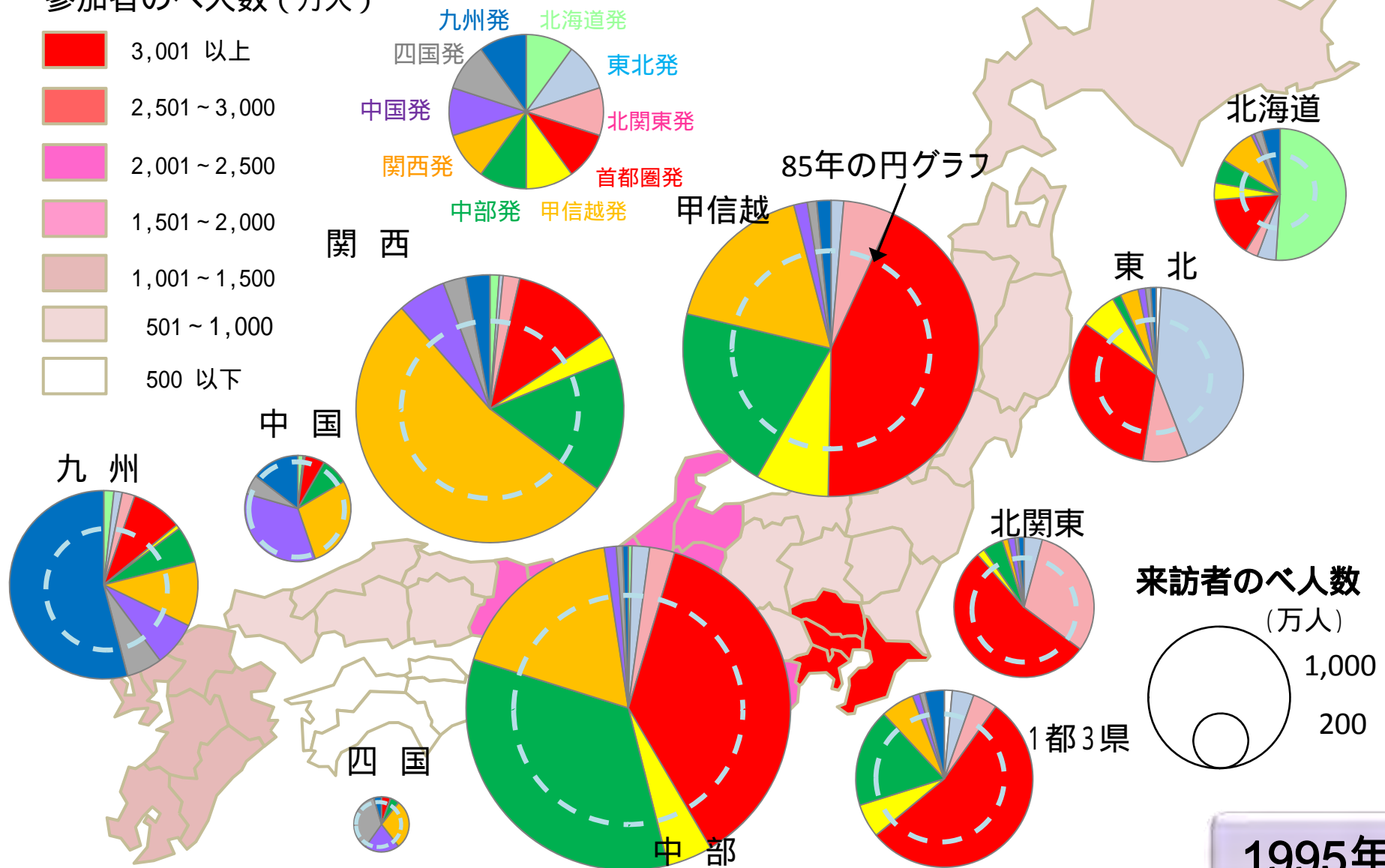
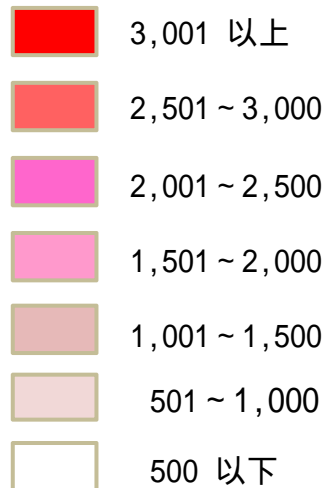
# 宿泊観光旅行者の動き

参加者のべ人数（万人）



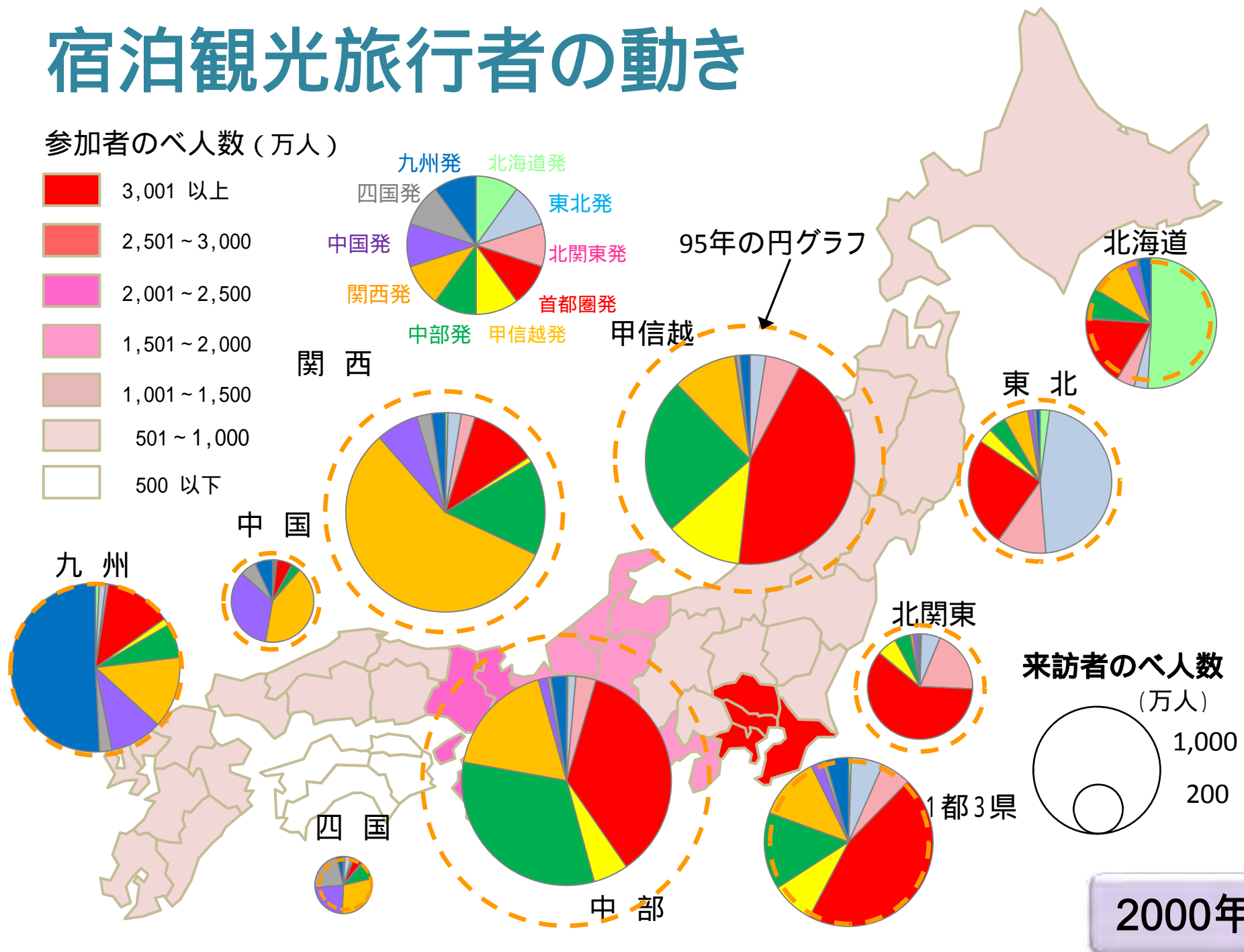
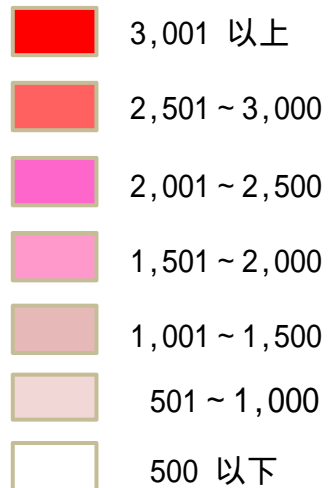
# 宿泊観光旅行者の動き

参加者のべ人数（万人）



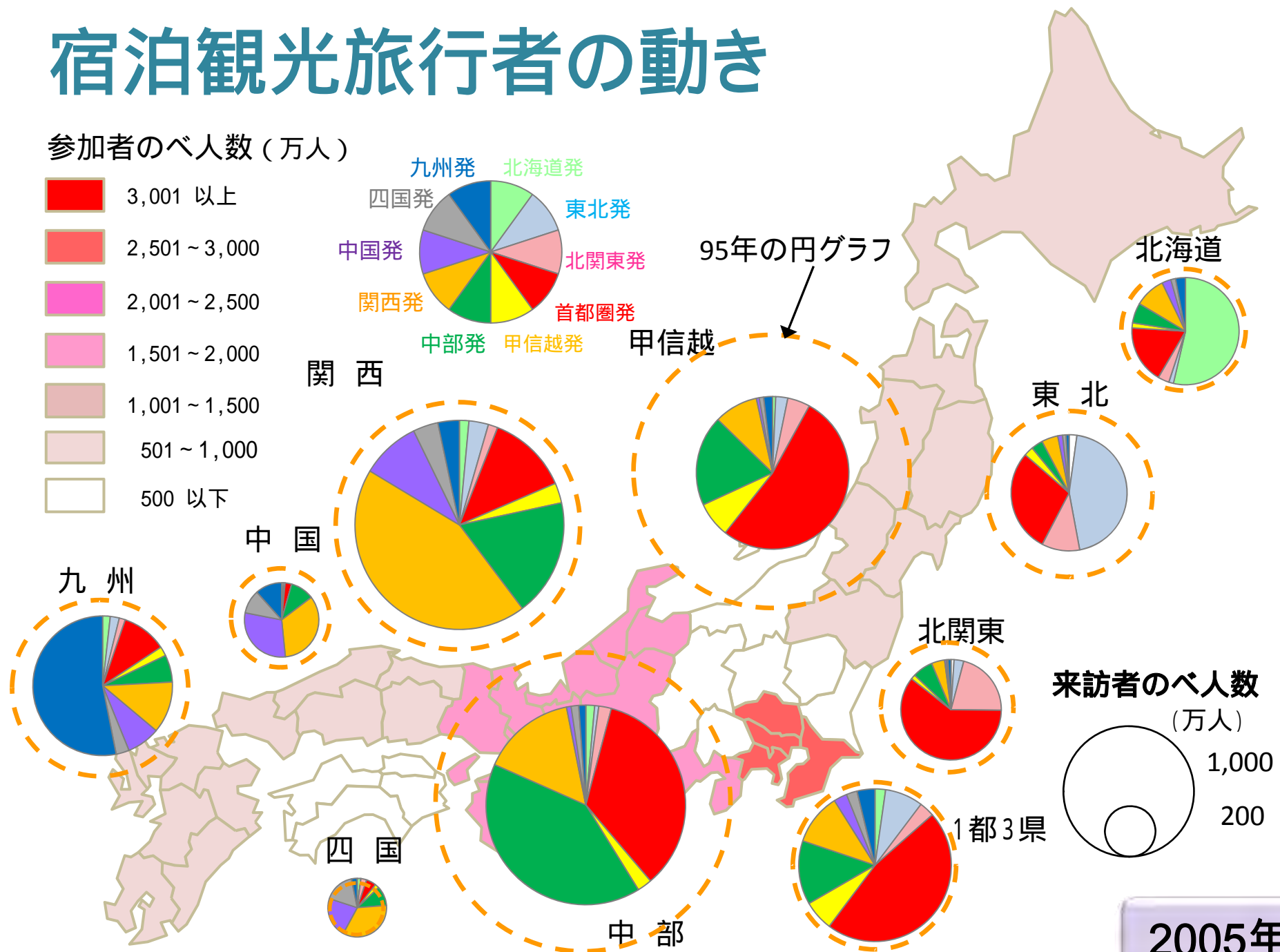
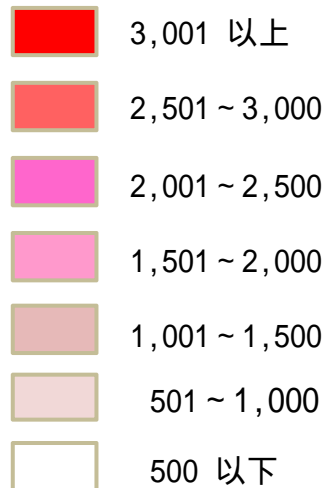
# 宿泊観光旅行者の動き

参加者のべ人数（万人）

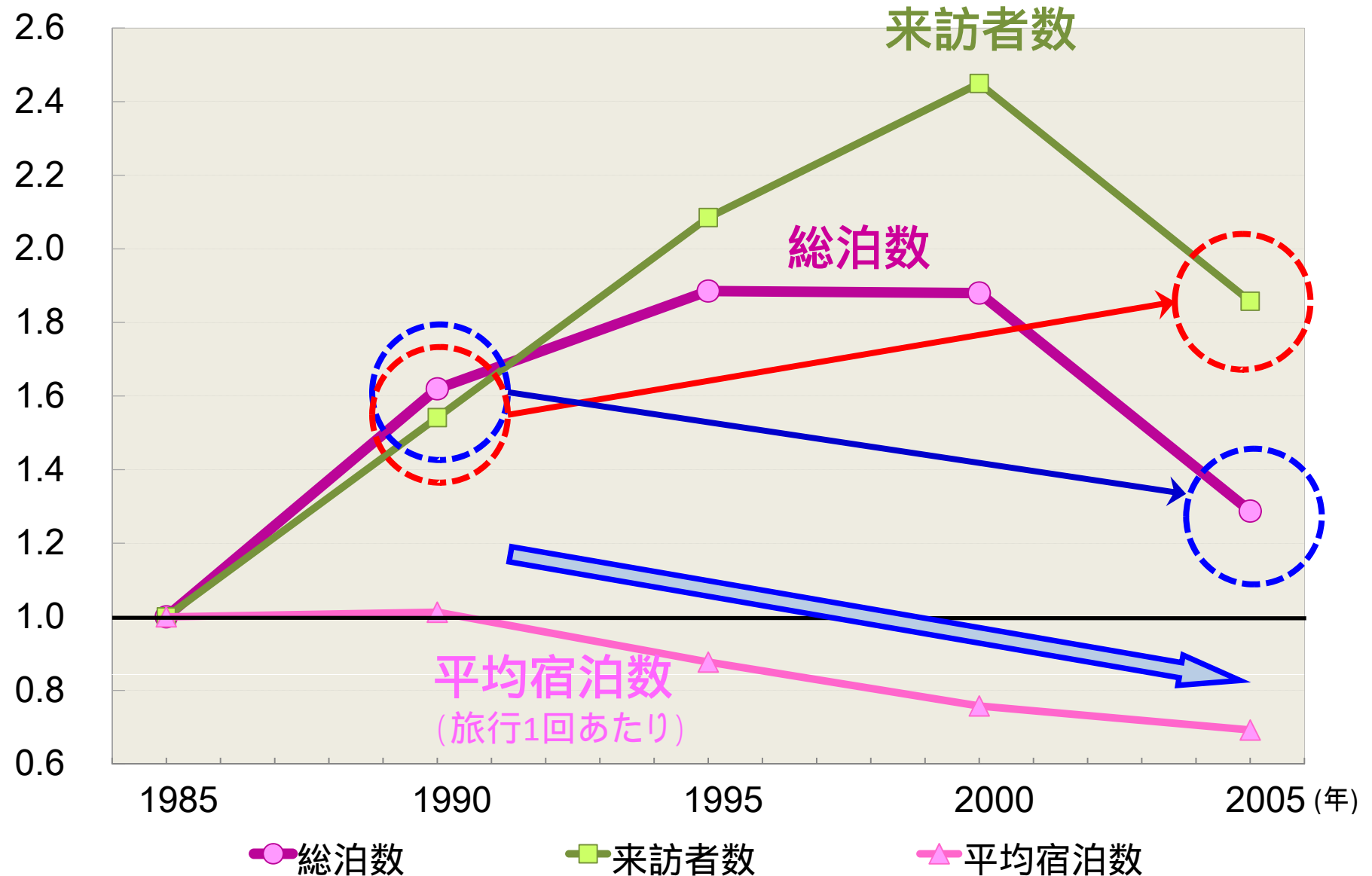


# 宿泊観光旅行者の動き

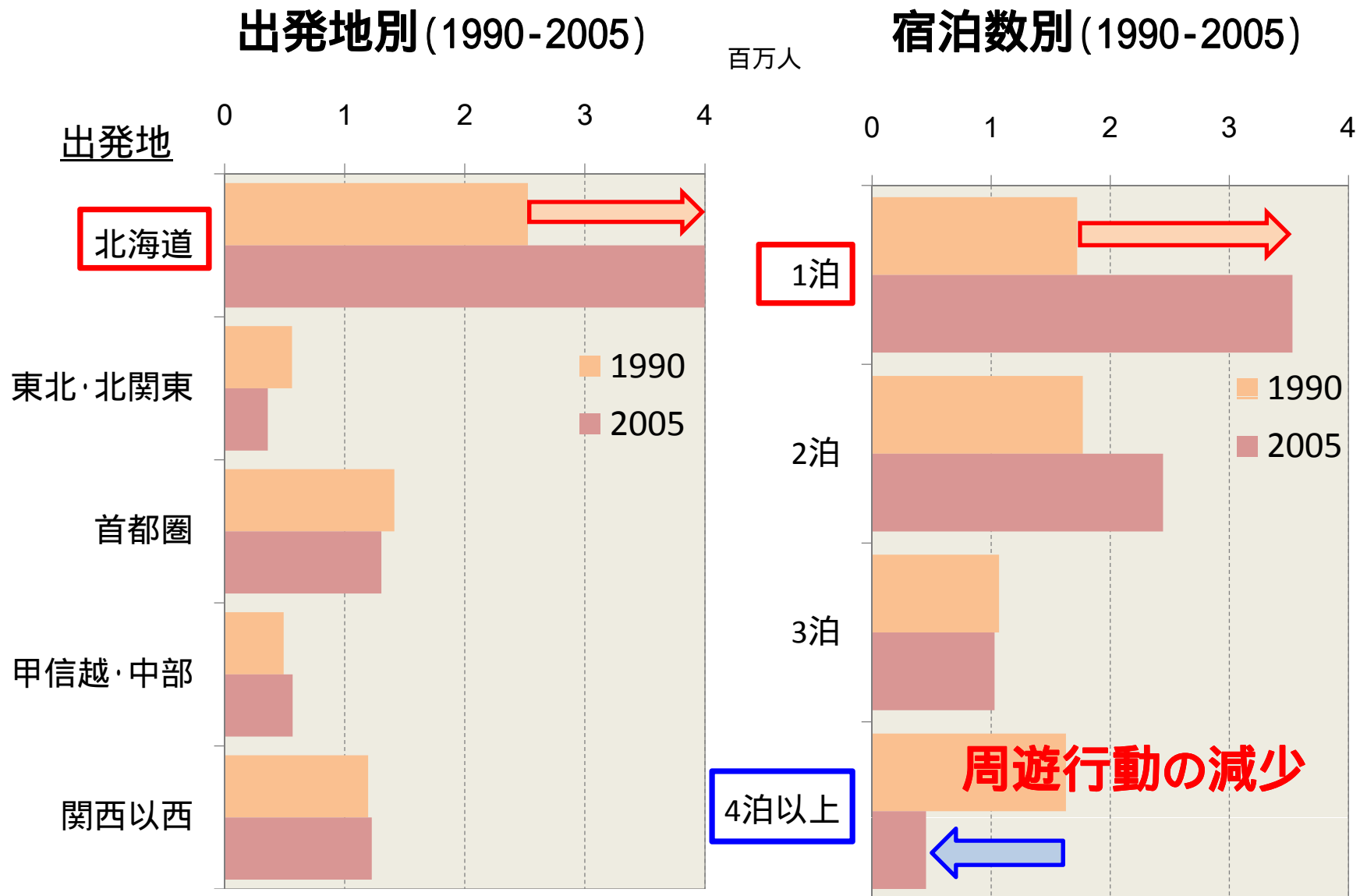
参加者のべ人数（万人）



# 北海道来訪者の総泊数の推移(1985年を1.0)



# 北海道来訪者のべ人数の変化



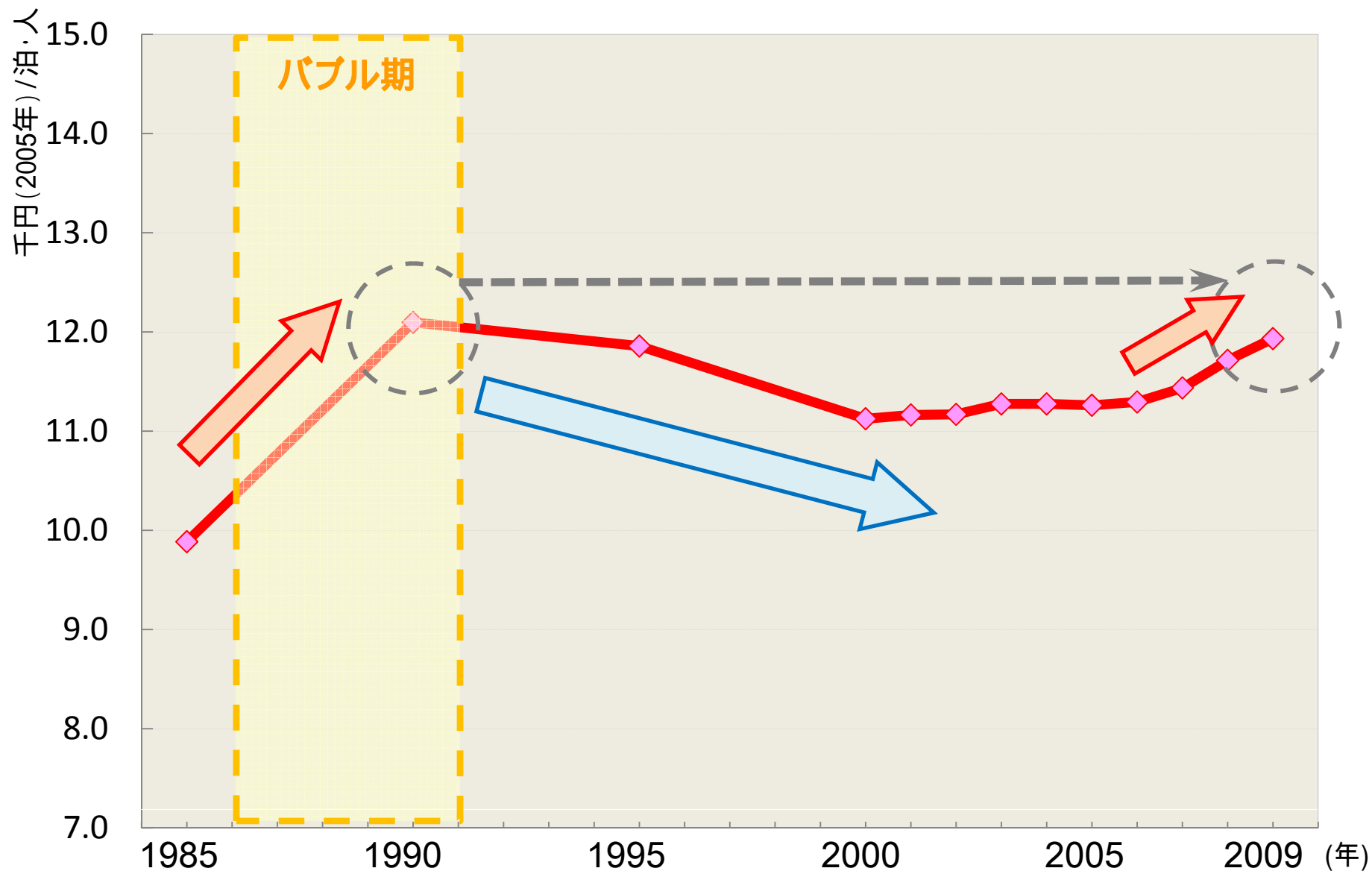
# 地域間の旅行者数の変動のまとめ

旅行者流動の変化の様子は全国一様ではなく  
**地域毎に大きな差**がある

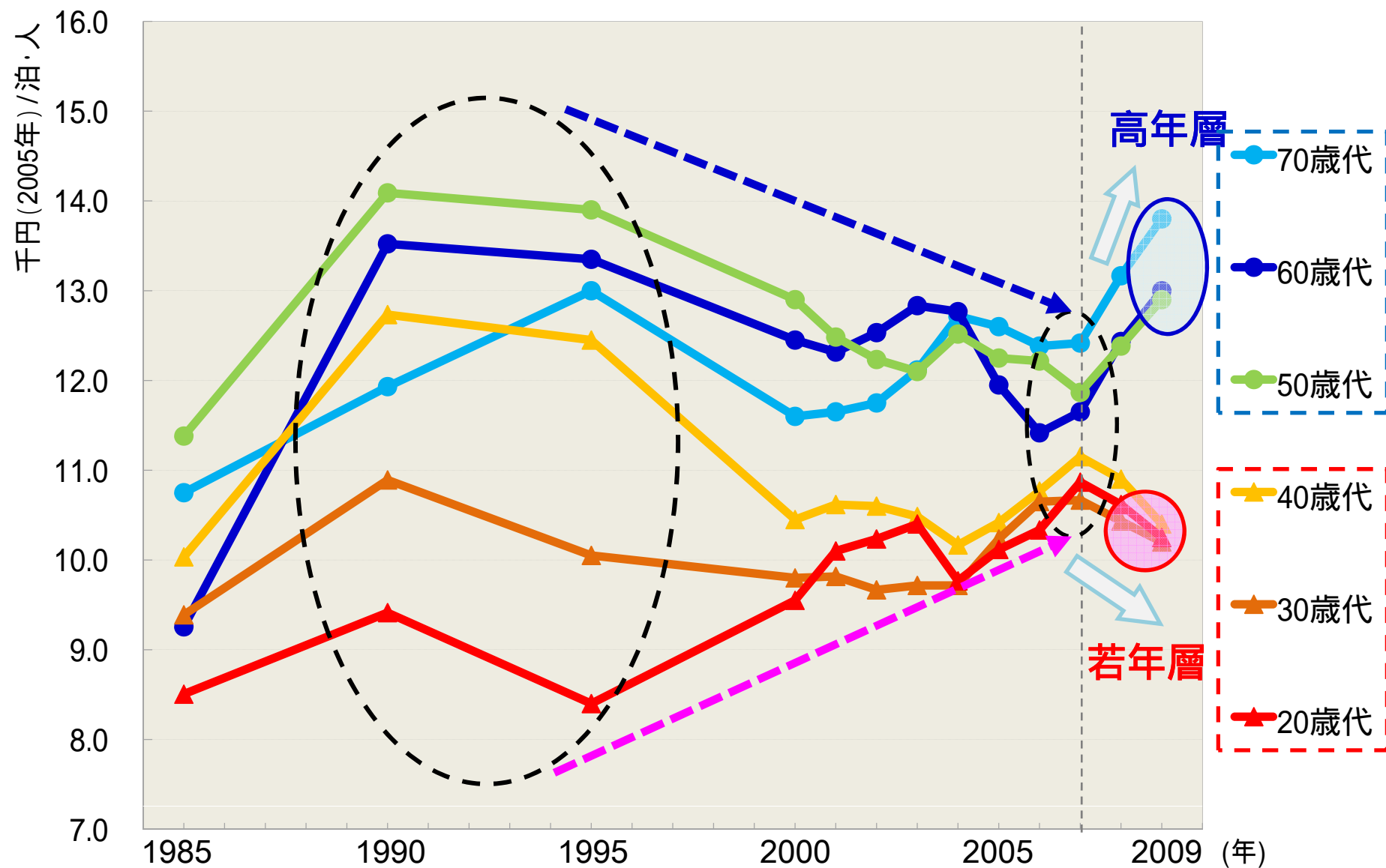
- ・ 甲信越の95年以降の激しい落ち込み  
→ 20歳代のスキー旅行の減少
- ・ 来訪者数の落ち込みは少ないが、総泊数は伸び悩み(北海道, 首都圏, 四国, 九州)  
→ 同ブロック内での1泊旅行の増加 & 長い旅行の減少  
**平均宿泊数の減少**

1. 宿泊数に関する分析
2. 地域ブロック間の旅行者数の変動分析
3. 宿泊費に関する分析

# 宿泊費(千円(2005年)/泊・人)の推移



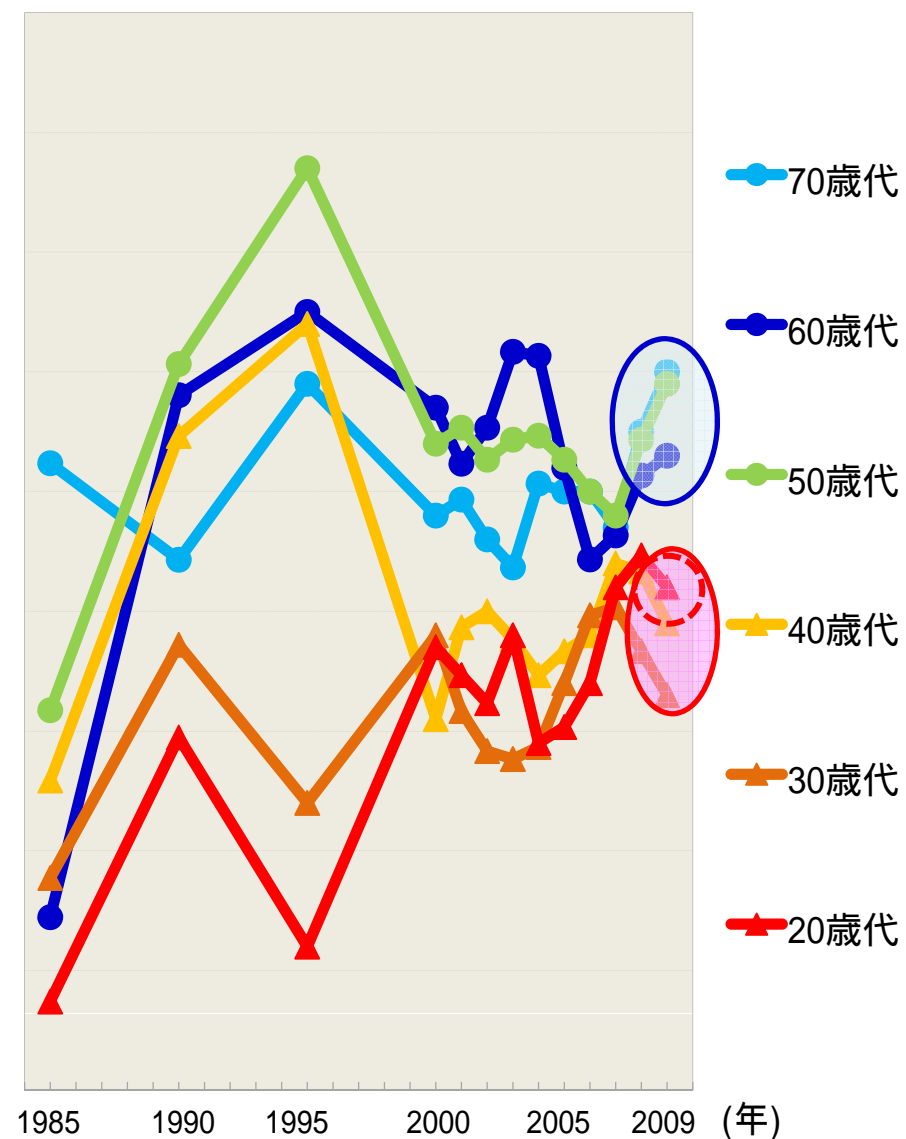
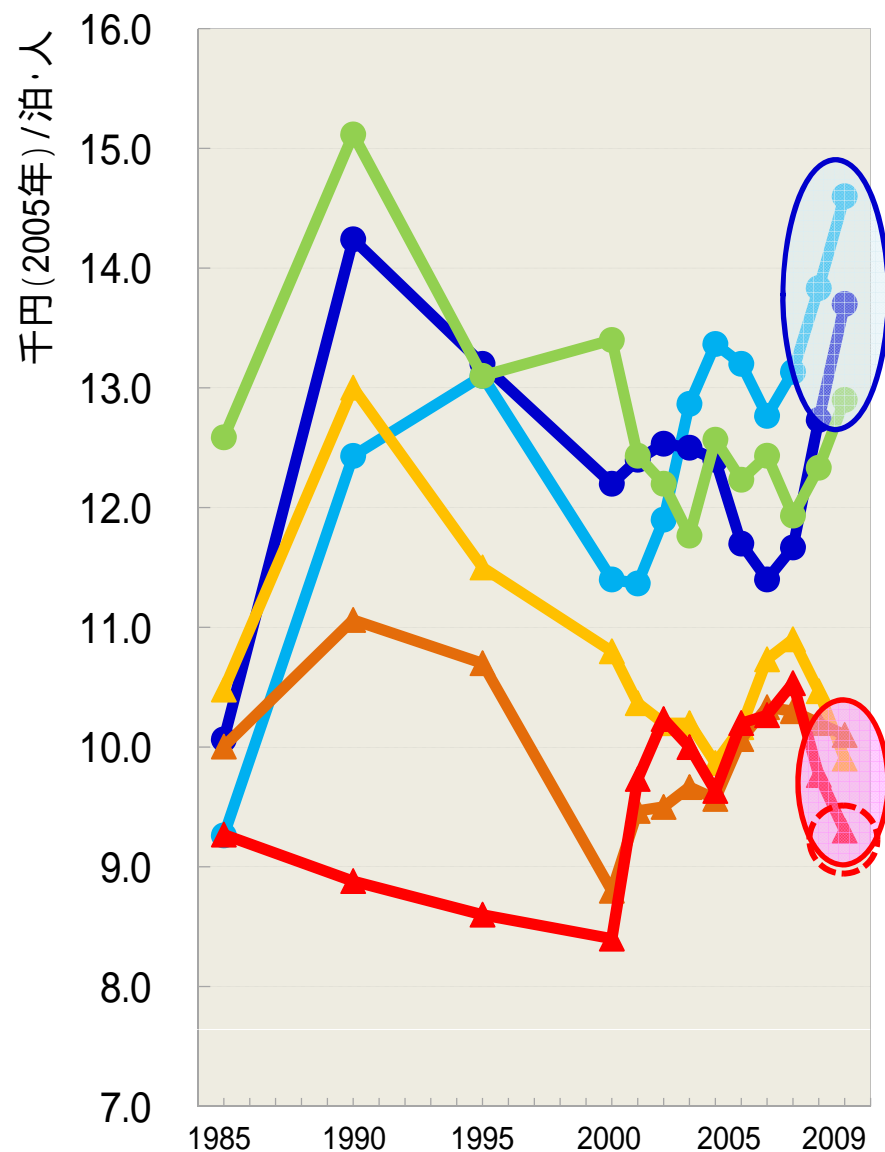
# 1泊あたり平均宿泊費の推移(年齢階層別)



# 1泊あたり平均宿泊費の推移(性・年齢階層別)

男性

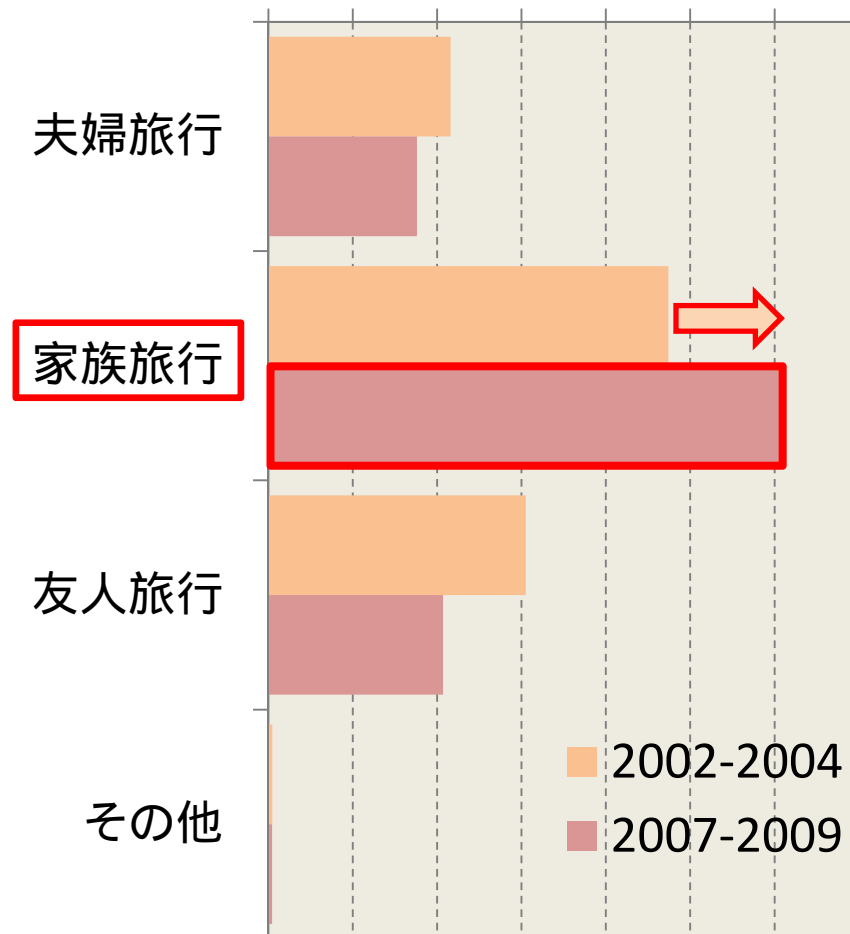
女性



# 高額支出層（宿泊費20,000円以上/泊）の旅行形態の比較

## 50歳未満の高額支出層

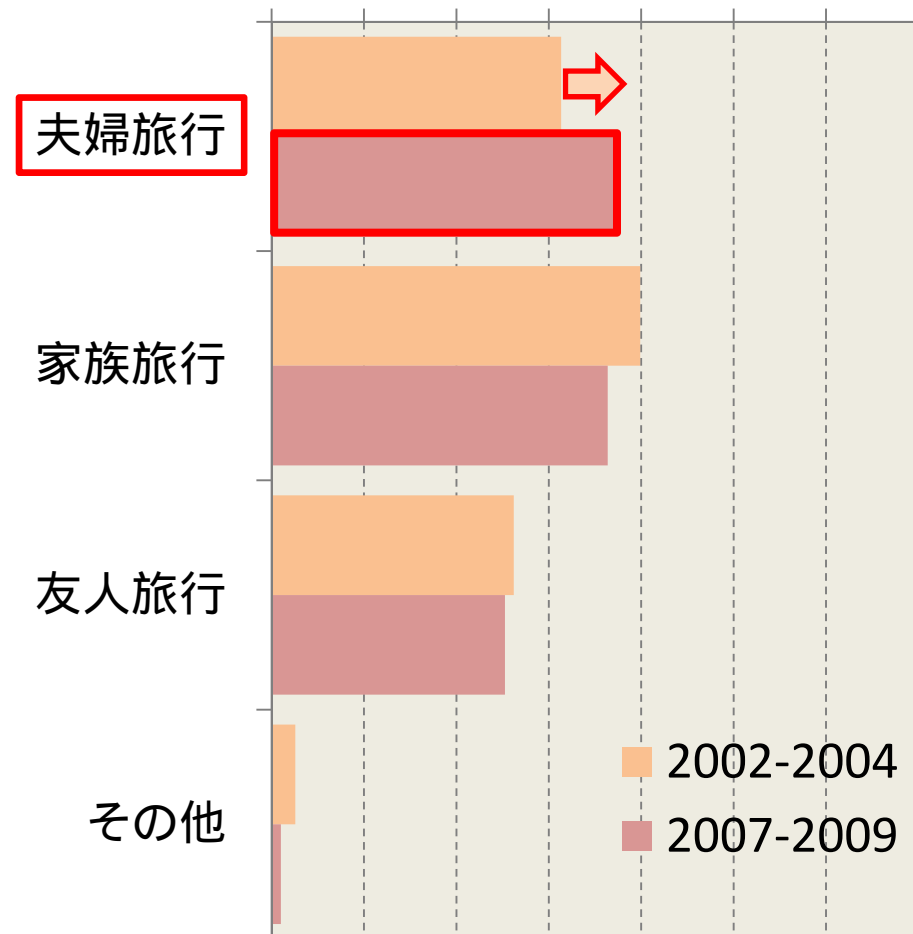
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70%



N=213(2002-2004)  
N=227(2007-2009)

## 50歳以上の高額支出層

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70%



N=351(2002-2004)  
N=297(2007-2009)

# 宿泊費用に関するまとめ

## 若年層と高齢層とで異なるトレンド

### 【若年層】

- ・ 近年は減少傾向( **女性**の方が高額)
- ・ 高額旅行は**家族**と一緒に

### 【高齢層】

- ・ 近年は**高額化**が進行(特に**男性**)
- ・ 高額旅行は**夫婦**で

# まとめ

## 既存の観光統計データの利用

(簡単な集計 + 新たな視点 + 見える化)



## 国内宿泊観光行動の特性、過去のトレンド

- 旅行者属性(年齢, 性別など)や  
地域によって 傾向が大きく異なる
- 年齢、世代、地域、旅行目的別の対応



## 効果的な観光施策検討のための情報

長期のトレンド + 短期のマーケティング + 個別の詳細な分析

# 今後の観光施策のターゲットおよび 若年層の観光離れへの対応

- 高齢者(団塊世代)は引き続きターゲット
- 高齢層は、旅行者数も多く、高額旅行も実施
- 団塊ジュニア世代の家族旅行
- 今の20歳代には、これまでの対応では効果が少ない(価値観の変化) 再教育が必要!?
- ひとり旅は、観光による経験等の意味では？だが、観光消費に着目すればターゲットの1つ
- 今の20歳代が旅行形態を変えるときがチャンス
- 20歳以下への施策が重要(家族旅行、孫との旅行)

# 大学生の時間の使い方の再考

- 観光旅行のインセンティブ  
「今しかできない！」(周遊観光等)
- 就職活動開始時期の見直し  
大学2年生からさせるべきか !?
- ダブルスクールのあり方  
たいして勉強もできていない !?

「今だからできること、すべきことは何か？」

# おわりに

若い人には、関心を地図上で広げてもらいたいです。

若いときに、あそこに行って何を見たとか、何を感じたというのが、ものすごく重要なんです。

違う分野の本を2, 3冊もって、年間少なくとも30日は旅行をしてほしい。

私は大学生のとき、少ないときでも年間82泊は東京を離れていました。

そのときのことは、いま、ものすごく大きな財産です。

土木学会誌 行動する技術者 森地茂先生インタビュー記事より抜粋